

---

# 秋の夕暮れ

K\_Sayuto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋の夕暮れ

### 【NZコード】

N2088Z

### 【作者名】

K\_Sayuto

### 【あらすじ】

ある秋の日、日本の人口は男子が1人減つて、女子が1人増えたと思う。

高校で野球部に入っていた水木 秋次はある日起きたと女の体になっていた?

よくある異世界物でもなくよくある転生物でもなく、よくあるなつちやつたパターン。神はむかんけー。

更新速度は出来る限りどんどん更新してこきます。

## まえがき

俺は水木 秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立つて  
おります。

---

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰つ  
て、家についたら風呂入つて、リ カーン見ながら飯食つて、予習  
なんてめんどくせーと睡眠に入つたわけだ。

で、それがどうやつたら今の状況につながるのかと考えて  
いる。繋がるどこか接点すらちげえ。そもそも次元がちげえよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認し  
ようと鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女  
なわけで。勿論オレツ娘つて訳じやない、いや他人から見たらそれ  
以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはず  
なんだよ。

## 第一話 僕が女に！？（前書き）

水木 みずき  
秋次 しゅうじ

ある日起きたと女の体になっていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパッチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木） かずえ  
和枝

秋次の母親でスタイルは良くてしの割に結構若く見られている。

田村 たむら  
静流 しずる

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になってしまつた事を家族よりも先に打ち明けられた。

## 第一話 僕が女に！？

「なんだよ！」つや

鏡を見て放心する。少し経つて俺はある物を確認しようと思つた。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちうういやあさつきの声も妙に高かつた様な・・・。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべえ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だつて触つてみて感じちゃつたりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなれーいとオカソの声がしたので俺は

「今準備ちゅー

と危うく言つてしまいそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかつた。何も返事がない事を不審に思つたのかオカソが階段を登つて来ている。

ヤバイ、どうしよう。そりだつ、鍵をかけよ。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次一、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさいーー」

とオカソがドアをノックしていつ。俺は

「風邪引いてるから今日は休む

と言つてしまひそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべえほど辛いからうつらないよう俺を隔離する”と綺麗とは言えない自分で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさいーー」

病院だつて、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねえだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいなかりやんとなんか食べたりしなさいよ

とオカソが去つて行つたので一息付く。つて、今ので打ち明けにくくなつた気がするのは俺だけだろうか？でもどうすりやいいんだ？女の体の事なんか一人もわかんねえし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

今日は秋次休みか、まつプリントとか持つてつてやるつこでお見舞いでもしてやろーかなあと思つてみるナビこざなうつじうとめんどくせえ。

ピロロロ、

ん、メールか。つと秋次からだ。えつと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃあ今日来てくれ”と届いた。

今日は6時間授業だつたが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には2～3時間で終わつた気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ來た。インターほんを鳴らすと誰もこなかつたがメールで”開いてるからはいつて”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで來た。

「しゅーじー、きつたぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が來たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあつたので。

「なんの事だかわからんねえけど俺は信じるぞ」

と言つとガチャと鍵の開く音がしてゆつくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だつた。

「あれ、秋次……の彼女?」

秋次には彼女はいなかつたと思うが……まさかこの事だつたのか話つて?と俺が思つたがその話はそれと全く違つた物だつた。

「ち、違う……俺が、秋次……だよ」

「ナンダツテ?コノオンナノコガシユウジダツテ?」

「ああ、同名か。でこの家の息子の秋次は?」

俺がそういうと秋次と名乗つた女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は?何を言つてるんだこいつは、そもそも息子つてのは男だろこいつはどうみても女じやないか。

「おいお前、冗談もいい加減にしとけ」

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言つと。そのいかれた女の子は一瞬ビクッと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろつづてんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさつきの喋り方のまま壁を叩いて言つと女の子ははつきりとも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言つたのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言つように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさつきの表情のままさつさつたので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余つてたお前を俺が誘つた時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、むちむち」

つてこいつ本当に全部当てるやがる、本当に秋次なのだろうか？・  
・・つてなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃあ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

「今まで言わいたら信じる他ない。でもなんで女子の姿なんだ？」

「寒は・・・今日朝起きてみたら女になつて、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言つて女子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておくと秋次の顔が真っ赤になつてた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あっ、わらい」

俺は慌てて手を離した。

「それで、お前の両親は知つてんのだよ・・・な？」

一瞬ピクッと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかつたかって? だてに幼馴染やつてねえよ。

「お前ならもうわかつたよな、それで、お前から俺のオカンとかに言つてくれないか?」

「お前せう来ると思つたさ、まあ 親友が困つてゐのを見過せないし。

「わあーったよ、その代わり今度奢れよ

「ありがとな」

「つへ、今更感謝すんなよ気持け悪・・・くもねえな、今のお前なかなか可愛いぜ。ばつてえーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。こじても、改めて思つたけど・・・お前階だけえな」

俺が高いんじゃなくお前が小さいんだそう思つたけどまあ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になつてつー3回つくらい小さくなつたと思つ。と俺が考へていると。

「ただいまー」

秋次の母親が帰つて來た。さて、ミッションスタート。

## 第一話 とつま、ミシシッポンパーク?

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言つと静流は任せると言つてトトに降りて行く。俺もオカソに見つからぬように降りる。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い?」

「まあ、そんなとこです」

「そ、う、こ、つ、も、ひ、の、子、が、お、世、話、にな、つ、て、る、わ、ね、え」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おー、こー、

トト

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は?」

オカソが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこいつってたみたいでさっき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次?本当に秋次なの?」

「ああ、オカソ。俺だよ秋次だよ」

「まあ、なんてこと。」んな・・・・・・可愛くなつちやつて  
へ？

直後俺はオカソに抱きしめられた。あれ？オカソの胸がめつちや  
あたつてるけど興奮しない、つてか親に興奮するわけないか。

「オカソ、疑わないの？」

「静流君だつて言つてゐし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さ  
んには私から言つておくわ。これから的事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカソ。ありがとう」

「あ、秋次。今日からオカソじゃなくてお母さんつて呼んで頂戴。  
それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言つたことはないから少し恥ずかし  
いがこのせいしょーがない。

「わかつたよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒に  
ついてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにな

まつてお母さんなぜ最後のまつ笑つてたし。なんかこええよ。

「はい、できる限り間違いは犯さないよ、頑張ってみます」

つておい静流完全拒否しのよ。

「わあて、上に行こうか」

静流がそう言つて俺の腕をつかむ。こええよ、前の俺だつたら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときつてこんな感じなのかなあ?

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻つてきた。

「それにしてもお前本当に女になつたんだなあ、力とか全然なくなつてるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だつてお前さつとき本気で俺の手を振りほどこうとしてただる」

それは本当のことだつた、本気でふりほどこうとしたがビクともしなかつた。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに(とあることにより全治2週間のけがを負わせられた過去あり)さつきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でも何か変わつているかもしけない。

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか?」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になつたと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思つていると、急に扉が開きお母さんが入つてきた。

「秋次やつたわ、お父さんがうまくやつてくれるつて。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいつて、準備しなさい」

「準備つたつてどうすつやいいんだよ」

「着替えに決まつてるでしょ」

あー、着替えですかそうですか。つて着替え？までまで、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、つてよく考えたらこの美少女つて俺じやん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねえよ。でも待て、着替えたたら見えてしまうんじやないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「ビーした秋次、顔真つ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんなかったぞ。

「う、うむせえ。つてか静流はとつとと出る」

「そうねえ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しごしがを見る。

「ああ、着替えたわー」

は？

「いや、お母さんが着させてくれるんじゃないの？俺は隠じてるから

「何いつてんのよ、これからその体で何万回も着替えることになるんだから早めに慣れときなさい。それに」

それについてなんか怖い予感が・・・

「ほんの、あ・く・ま。」「ほんの、あ・く・ま。」

## 第三話 身近な落とし穴（前書き）

水木 みずき  
柚木 ゆずき

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

## 第三話 身近な落とし穴

結局俺は、文物の服などを持つてゐるわけではないので（持つていたら変態だつてwww）ジーパンにパークーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・・俺が普段着てゐる服は全部ブカブカだつたので俺が小学生の時に着てゐた服がぴったりだつたので助かつた。お母さんがとつておいてよかつたと思う。

「それじゃ 静流君、お留守番頼めるかしらねえ」

「ええ、大丈夫です。秋次、まあがんばつてこい」

こいつ顔では真剣な振りしてゐるが内心では面白がつてゐるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてゐるじゃねえか。帰つたらいろいろといじつてやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒつてこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だつたのは良かつたんだ、多分・・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドッグやられたり、拳句の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たつて声をあげてしまつた。肌の感覚がすごい敏感になつてた・・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になつてしまつた事だがそれに運動して肌の感覚が敏感になつてた、まあ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになつてた事かな、もしかしたら涙もろくなつてゐるかもなそれは結構つらいな。これから先こんなでやつてけるのだろうか？まあ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座つて待

つてると一人の男が田の前に現れた。

「やあ秋次、気分はどうだ?」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン……、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。  
俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは?」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいつそ名前も変えて  
しまおうと母さんと話し合つたんだ」

いつの間に話し合つたんだよ、それにしても結構親つて子供の事  
を考えているんだな。深くそう思つよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが  
大変だろ。だから、お前の字からとつてあきだ、漢字はそのまま秋  
でどうだ?」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまあそこはや  
っぱ慣れろつてことか。漢字を間違う事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言ってポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなんに驚くな、もうすでにこいつっておいたんだよ。お前がいやだつて言つたら再発行しようと思つてただけだ。そういう、検査結果だがいたつて健康」

「本当か、よかつたあ」

「やう早まるな、いたつて健康じやなかつた」

え？ 今何で？

「お前は重度の日光過敏症でな。まあ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかつたと思つたが昼間は日光に当たつてはいけないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過すぎるところになると大変なことになるから気をつけや」

それはそれは、相当地ひいて。俺これから生きていけるか自信無くなつた。

「で、お父さんもしかして・・・戸籍も変えられた？」

「まつまつは、心配するな。しつかりと水木 秋 性別女に変えたが」

「ひやひや、籍とかの心配は必要なくなつたよつだな、こつたいどんな手段を使つたのやひ。

「わうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか?」

「違ひ、こたつて健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだつて? お金あげるから彼と一緒にどつかでたべてきなさい。お釣りはこすかににでもしなさこ、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

やう言つてお父さんは財布から一万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんじやないかと思つがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにひりつておく。つひひや絶対7千円程度余るぞ(笑)。

「わかつたアネキは?」

「そつちは聞こへないが多分今日も遅くなるんじやないか?」

「ふあーー」

「うこつて俺はあくびをしながらドアノブに手をかかへつゝするが。

「ぐぶつ」

「ひやひや、身長が縮んでいたのでドアノブ(もともといいのは普通

のより高い位置にあつた)が顎にあたつた。

「大丈夫か、秋? 顎が赤くなつてゐるじゃないか。女の子になつたんだから体を大切にしなさい」

「ふわあーい

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもなあ・・・・。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事を全く考えていなかつた。THE灯台もと暗し・・・だな。

## 第四話 危ない訪問者（前書き）

田村 佳代

静流の妹で俗に言う・・・。いろいろと危険な人物でありどうやら秋次もとい秋の事が好きなもよう。

## 第四話 危ない訪問者

「かえつたぞ～」

俺は家の扉を開けながら奥から一人の男が歩いてきた。 静流だ。

「よお、どうだった？」

「どうだったといわれてもなあ、いろいろとあった

俺がそういうと「何があった？」と聞かれた。出来れば聞いてほしくなかつたような気がするよつたな気がしない様な・・・。

「なんかさ～、戸籍とか普通につくりかえてもらつたし改名もしちやつたし。でも一番は・・・・・この体に持病があつた

「持病！？ それでお前は大丈夫なのか？ 命にかかるよつた事なのか？ えつと、それで」

「落ちつけよ、お前の事じゃないだろ」

「俺の事じゃなくてもお前になんかあつたら俺だつて悲しいんだぞ」

急に静流は怒鳴り俺は一瞬ビクリしてしまひ少し後ずさつてしまつた。

「わらい、急に怒鳴つて。でもな、ちゃんと親友としてお前を心

配してんだからな。それで病気はビッグなんだ?」

「うん、日光課金病? だっけか」

「日光過敏症の間違えか?」

「そー、それそれ

静流はフムと考えた後。

「じゃあ、今度必要なものでも買いに行くか?」

必要なものとな?

「何が必要なんだ? つて顔してんな。要するに田にあたつちやい  
けないんだから日傘とか日焼け止めとか帽子とか必要なんじやない  
のか?」

「なるほー、さっすが静流だな」

と俺が言つたとこで - - - ピンポン - - - とインター ホンが鳴  
る。

「あ、静流待つとけ出てくるか?」

と俺は行つて玄関まで行き扉をあけると。

「すいませ ん、うちの兄がお世話にな、つつつつつー! ? .」

そこには一人の女の子、静流の妹の佳代ちゃんがいた。

「どうして、先輩の家に女の人が……。まさか、先輩の彼女?」

「いや、ちがつ」

佳代ちゃんは目を虚ろにし四次元には通じていないポケットからたたたたつたーんという効果音もなく一つの折りたたみ式ナイフを取り出しそれを広げ両手で持つ。

「先輩は私だけのもの、誰にもやらない」

佳代ちゃんはそれを俺に突きつけ飛びかかってくるが俺はそれを紙一重でよけるが動きの要領が違っていたので本当だつたら普通によけられたはずがこけて倒れてしまつた。いきなりながら大ピンチ、この小説はもう終わるのか?

「なんか、私の第六感が貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒につて言つてるけど私は悪い子だから無視しちゃうね」

いや、その通りだよ。無視しないでくれ。つてマジでヤバい、死ぬ前に行つておくさつきのメタ発言すいませんしたー。

佳代ちゃんはナイフを振り上げる。終つたと俺は思つたがいつまでたつても痛みは来ない。ああ、痛みもないまま天国へ行けたのは幸いだつたな。

「やめろ佳代!」

俺はそんな声が聞こえたような気がして目をあけると佳代ちゃん

の手を押されて、いる静流が田に映つた。

「お兄ちゃん！？」まさか……。そう、先輩の彼女じゃなくてお兄ちゃんの彼女だったのか。でも、お兄ちゃんも私だけのものなんだからどの道ここへあなたには三途の川を渡つてもいいつ」

佳代ちゃんは静流の手を振り払い俺にナイフを振り下ろす。今度こそ終わつたな、天国では俺どんな姿なんだろ。男に戻つてたらいなあ。と覚悟を決めるがまたもや痛みはなかつた。今度こそ田を開けたら田の前に川があるんじやないかと思う、それとも異世界に転生でもするのかな？俺はそう思い田をあけるとそこは俺がよく知つている場所、俺の家の玄関だった。

「あれ、生きてる？」

俺は顔をあげるとそこには悲しそうな顔でナイフを持つていない佳代ちゃんがいたナイフは佳代ちゃんの足元に落ちていた。

「どうして、貴女が先輩なの？」

俺は少しの間意味がわからなかつた。

「どうして、女になっちゃつたの？」

俺は静流が話してくれたのだと思ったがそんなすぐに信じるわけもないと思って静流のほうを見るとのびていた。多分振り払われたときに頭でも打つたのだろう。

「どうしてなの？ なんで、こんなことになつてるの先輩」

まさか、見破ったのか。この人は看破眼の持ち主ですか?と思つて、いたがさつき行つて、いた事を思い出す。“第六感”とか“貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒に”と言つて、いた。まさか本当に第六感をもつて、いるのか?

「本当に俺だよ、秋次だよ。でも、どうして俺だつてわかったの?」

「うん、先輩の心と一緒に澄んでいて暖かくて、それに心紋が同じだつたから」

「心紋?」

「心紋つて、いうのはね、指には指紋があるでしょ。それと同じようなものが心にもあつてそれが心紋」

すごい、佳代ちゃんは人の心を読む事が出来るのか?俺はその事をすごく聞きたいと思つたがあまり他人に詮索されるのは良い気がしないと思つたので俺はやめておいた。

「ごめんなさい先輩、本気で……殺そうとした」

「いや、もういいんだよ。それより静流は?」

俺は静流のほうを指さし聞いてみると佳代ちゃんは静流の額に手を当てるところを向いて。

「大丈夫、脳内出血もしてないし軽い脳梗塞だから命に別条はない。起きたときにちょっとふらふらするかもしれないけど」

すゞいな、第六感では「なん」ともわかるのか。

「それより、先輩大丈夫?」

「ああ、大丈夫だよ。つと」

俺は少しフラッとして佳代ちゃんに支えられる。さつきまではいろいろあつて気がつかなかつたけど佳代ちゃんの皿を見るときに顔を上げる必要がある。それはつまり・・・。

「ちつちやい先輩も可愛い」

と佳代ちゃんに抱きつかれた。佳代ちゃんももともと同学年の中では小さい方らしいが俺はそれよりも小さかった。なんか、自分はちっぽけだなと思う。

## 第五話 他に変わった事（前書き）

なんか、H口くするつもりはなかつたんだけど「じつに」（ジヤンル（文体化））の小説を書く場合つて相当なテクニックがないと回避する事は無理だと思つ。ちなみに俺にそんな技術はあるはずない。H口いのが苦手な人は今すぐ右回り360度回転して歩みを進めたほうがいい。結局はこつちに来るつていうね。

## 第五話 他に変わった事

俺が佳代ちゃんに抱きつかれてから数秒後、静流が起きた。

「あれ、ここはだれ？俺はどう？」

とふざけていたが俺と佳代ちゃんは華麗にスルした、いい加減降ろしてほしいと思ったのだがどうやら俺は佳代ちゃんよりも力がなくなつたらしくなんか抵抗しても無駄で終わる気がするのであきらめる。

「あ、そうだ。晩御飯をどつかで静流も一緒に食べりつて言つてたけど佳代ちゃんも来る？」

「うーん、お兄ちゃんは行きたいんでしょりうでしょ。しうがないなあ私がお母さんに電話しといてあげるよ。どうせ今日ママナルドで言つてたし」

佳代ちゃんはさう言つて携帯を取り出し電話をかける。

「うん、そう、だから今日は先輩とお兄ちゃんと一緒に食べてくれる。うんじゃあ・・・。おつけ大丈夫だったよ。トーレー、早速行こう」

俺はそこまで行く行こうか考えていなかつたのだがあまり遠くへ行くのもめんどうをかつたので近くのサザリアへ行くことにした。やっぱ狙いはミラノ風ドリアとミックスグリルだな。あの肉汁はたまんねえよ。

俺たちは家を出てサイゼリアへの道を歩みだす。

さつきのまでの威勢はどこに行つたのやら結構恐ろしい事になつていた。とりあえず入店した時までさかのぼつておく。

「私はなににしようかなあ、秋先輩はどうするんですか？」

「うーん俺は・・・・ってなんで俺が名前変えた事知つているの？」

「そりや、第六感ですよ第六感。ちなみに先輩がスリーサイズ測つた時の恥ずかしー出来事までわかりますよ」

わー、その事を言わないでくれえもつ思い出したくない声が出てしまつた、まだそれだけならセーフだと思つ。でもその声がちよつと口かつたんだよどうやつたら俺からあんな声が出るんだよ。

「秋次なんかあつたのか?つともう秋なのか」

季節が?俺の名前が?と思つたがおそらく後者だらつ。

「お兄ちゃん、女の子には男の子にはわからない事があるんだよ」

「そういうものなのか、そつか秋。お前ももう立派な女の子への仲間入りだな」

「それじゃあ私が」ですね。そうだ、もう先輩は全部が女なんだ。

それはつまりぼそぼそ

そのぼやぼその所は聞こえなかつた、うんせつとかつだ聞こえなかつたんだ。

「あーもひつ、やけ食にしてやる。//ラノ風ドリアと//シクスグ  
リル注文だー」

「先輩はそれですかじやあ私も//ラノ風ドリアで」

「じゃあ俺はリブステーキだ」

皆がそれぞれの注文が決まり、ボタンを押し店員に注文する。しばらくたち料理が運ばれてくる俺はミックスグリルにナイフを刺し込み肉を切りフォークで肉を口に入れる。食べる前までは食欲がすぐあつたのだが肉を口に入れた瞬間にその気持ちは全て霧となって消えうせた。

「肉が・・・・美味しい」

「えつ?どれ一口・・・・ん、全然うめえじゃんか」

俺はまさかと思い嫌いなはずの「ローンヒグーンピースを食べてみると、案の定めちゃくちゃつまかつた。

「あー、先輩味覚も変わっちゃつたんですか可哀想に。今の先輩にとつて肉は大嫌いなものなんですよねちなみに野菜は全部好きになつてますし先輩の嫌いな甘いものなんて食べるのが止まらないくらい好きになっちゃつてますよ」

「秋、それは俺が食つてやるから。そのドリアだけは食つとこ」

「ああ、肉が食べれないなんて・・・・」

俺は肉が食べれない事に悲壮感を感じながらドリアを食べるがドリアが3分の1ほどなくなつた時に今度は満腹感に襲われた。

「静流、俺もう腹いっぱいだ

「マジかよ、お前こないだまでこれ3つは食えただろ

「ふえんふあいほふあふえふえふほう」佳代、口の中の物を片づけてから話せ

と佳代ちゃんが口の中に物をたくさんつめたまま話すがすぐに静流に制止される。

「はあ、腹がいっぱいですしい。水飲もう」

俺は水を飲むがそこである事に気がついてしまつた。今日、一度もトイレに行つてない。もう漏れる寸前だといつ事に気がつき俺はあわててトイレに駆け込むがそこでさらに危機に陥つた。一瞬間違えて男子トイレに入つてしまつたと思ったがここは男女関係なく洋式が1つだけある事を思い出し安心する。だが俺はトイレの仕方がわからなかつた。

「ヤバい、漏れる。どうすりやいいんだよ」

俺が深い絶望感に襲われていると。

「先輩開けて」

佳代ちゃんの声がして俺は急いで扉を開ける。

「どうしたの、俺女子のトイレの仕方わからねえよ」

「先輩ズボンとパンツ降りじて便座に座って

俺はすぐに言われたとおりにしてズボンを下ろしパンツをおろさうとしてあわてて口を開じて降ろし便座に座る。すると、俺の小さい胸が佳代ちゃんにわしづかみにされる。

「あっ」

また声をあげてしまつたが佳代ちゃんは気にならず手に力を入れる。そして俺は全身から力が抜けた。その時なにか水がはじける音がした多分俺の尿が出たんだろう。というかいつまでも佳代ちゃんが胸をわしづかみにし続けるせいで体がだんだん熱くなつていくような気がして俺の呼吸が乱れて行つた。

「ハアハア、か、よちゃん、そろそろ、はな、して

「あ、先輩すみません」

ヤバかつた、俺が俺でなくなるまで数秒前と言つたところだった。今のは・・・・・感じてしまつたというやつなんだろうか、それにしてもすげく、気持ちがよかつた・・・・・。

「先輩、顔真っ赤だけど大丈夫?」

「うん、なんか今俺が俺じゃなくなるかと思つた」

「『めんなさい先輩ちょっとやりすぎちゃったかな、でもこれで先輩が感度高いってわかったからこれからこういう事何度もやつちやうかも」

それだけは勘弁して下さんマジで。俺マジで恐怖症になるかも・・・

## 第六話 再認識

結局、佳代ちゃんがやつた事はただ単にやりたかっただけだったといつ。そのせいで俺は・・・・・。

「先輩大丈夫、一度出来ればそのあとはもう出来る・・・はず

「なんか、やつぱいいや」

何というか最悪な1日だつた。この後も何もない事を願いたいね。俺が軽くブルーになりながら席に戻ると静流が少し気にしていたようだが声はかけてこなかつた。お前はホントに空気が読める友達だな。俺がそう思つて席に着くと先ほどまであつた食べ物は全て消えていた。

「まさか静流、お前全部食べててくれたのか?」

「ああ、つたく今度からしつかり考えてから行動しろよな。まあ、美味かつたからいいけどな」

「ああ、ほんとに悪いな。つとめりやうか」

俺がそう言つて伝票を取りうつとして手を伸ばすが誰かの手が俺が取ろうとした伝票をとつた。

「いいよ、俺が払うから

それは静流だつた。

「マジで、サンキュー」

「やつは、これでまるまる1万円は俺のもんだ。俺が内心でそうカーニバルを起こしていただが次の静流の一言で静まつた。

「女の子に払わせるのもあれだしな」

「やつぱ俺が払う

そう言って俺が伝票をかすめ取るうとしたが、ヒヨイッと俺の手の届かない高さにあげられてしまった。

「お～れ～が～は～ら～う～」

「払いたければ俺から伝票をとる事だな」

おのれえ、こいつ人がめっちゃ小さくなつたのをいいことに今まで出来なかつた意地悪をすることは。畜生こいつでけえ、俺が男のときは間違いなく俺のほうがでかかつたのに。俺は出来れば使いたくなかつた最終奥義を使う事にした

「くらえつ」

「なつ、何をする秋離れお

俺が使いたくなかつた最終奥義、それは俺が静流に抱きついてそして静流が俺を離そと手を下げたときに伝票をかすめ取る、最高な方法だ。ほら見ろ、もつ伝票が届く位置にあるぞ。いまだ。

「お前は考えがわかりやすい奴だな」

またヒョウトイと上にあがられてしまった。

「おのれえ、 静流めえ。 あきらめて俺にそれをみせや」

「いや、 あきらめのはお前だら?」

「うひ、 くや。 あきらめるか。 そつこえばさつきから後ろから邪気がするのだが何だろ? 俺がそう思つて後ろを見るとそこには佳代ちゃんがヤンデレモード(?)でそこに立つていた。

「お兄ちゃんばっか、 ずるいよ。 私だつて・・・ 私だつて・・・ 先輩をギュッとしたい」

は?

「もう我慢できなーい

やう言つて佳代ちゃんは抱きつぐ。 なにか柔らかいものが顔を埋めて窒息するかと思つた。

「はなせえー

「後5分」

いや、 後5分つておきののを先送りにしてる人じゃないんだから。 俺は頑張つて抜け出そうとするが無理だった。

「じゃ会計しますぞおー」

静流はもう言つてレジに行く。ビルやら完璧にあきらめるとこいつ事だらう。

それから5分後に俺は離してもらい、今俺は3人で夜の道を歩いている。

「で、秋は明日学校行くのか?」

「うん・・・なんかお父さんが学校にももう立えてあるらしい」

「そうか、まつ頑張れや」

「他人事みたいだな」

「他人だろ?」

「そんな顔すんな、本当に冗談が聞かないやつだなお前は。出来なつ、こいつひでえ。大切な友達が困つてるつてのに他人事だからつて知らないふりかよ。」

「えつ?お前の席と俺の席は結構離れてるだろ?」

「まだ言つてなかつたな。今日席替えたんだよ」

なるほど、それでか。結構ラッキーだな。

俺たちがそんな話をしているうちこいつの間にか家についていた。

「じゃーなー」

「おひ、お前一人だししつかり戸締りしろよ」

「じゃあーねー先輩」

そして俺は一人になり家の扉を開け中にに入る。今日はいろいろあって疲れてるしどとと風呂に入つて寝ちまおう。そう思ふ俺は風呂場に向かい。相当根性を出して服を脱いだ。

「いじじ見てみると、本当に可愛いな。なんか肌も白いし腰も細い」

残念ながら貧乳だがな。つて何を考えてるんだ俺は。

「やつをと風呂入つまおひ」

俺は頑張つてからだとを洗つてから風呂に入る。俺は風呂は好きだった。気持ちよくて温かいからな。でも今回は入つて数分でのぼせた。頭がぼーっとして思考回路が全く動かなく、ただ俺の生存本能が告げていた。これ以上風呂に入つてたら危険だと。俺はぼーつとしている頭で風呂から出てタオルを取ろうとする。そこで意識が途切れた。

## 第六話 再認識（後書き）

感想や修正点あつましたらジャンジャンビリーベル

## 第七話 田覚めの良い朝

学校の一室で俺は明美さんと会面した。

「「めんね、秋次君。 私あなたの事を好きになれない」

「うひ、うひ？」

「だつて、・・・・・あなたは女の子でしょ」

え？ 俺は体を良く見てみる。 なんと俺は身長が物凄く低くなつていて男ならだれでも持つてる如意棒と宝玉がなかつた。

「そ、そんな馬鹿な」

「わよつなら秋次君」

明美さんが走つて行つてしまつ。

「まつて明美さん」

俺は追いかけるが体が小さくなつている為足も物凄く遅くなつてしまつているからすぐに見失つてしまつた。

「そんな、どうしてこんな・・・・・

俺はブルーになりながら家に帰つていた。

「よお、じうじた秋」

静流が現れた。

「ああ、静流か。実はさ……明美さんにフラれちゃったよ」

「そつか、……秋」

俺は返事をするがその時気がついた。あれ? こいつなんで俺の事秋って呼んでるんだ? 俺がそう思つていると静流が顔をちかづけて言つてきた。

「秋、そんな奴の事は忘れて俺の彼女にならないか?」

「は? お前何言つてんだよ俺は男だぞ」

「お前! 何言つてるんだよお前は立派な女じやないか」

そう言つて静流はさうそく顔をちかづけてくる。そして俺にキスをしようとしてくる。

「うわあああああああ

-----  
ドガツ-----

「いつてえ、頭打つたあ。つてこいは俺の部屋?」

俺はベットから落ちて頭をついていた。それを意味する事はつまり……。

「そつか夢だつたんだ、そだよ男が急に女になるなんて馬鹿げ

た話があるもんか。長い夢だつたな覚めてよかつた。あー、なんか  
気分がめっちゃいい

俺は時計を見るにまだ6時だったが今日は特別気分がいいような  
気がしてもう学校へ行くことにした。俺は壁に掛けられている学ラン  
に手を伸ばしハンガーから引っ張るように学ランをとり俺は着替  
えた。その時に何故か着にくかったような気がしたがたいして気に  
もせず別に腹も減つていなかつたので朝飯は抜きにして革靴を履いて  
家を出る。

玄関の扉を開けると外は雨が降りそうな天気だったので俺は折り  
畳み傘がバックに入つているか確認してそのまま家を出る。妙にバ  
ックが重かつたがそれもまた気にしなかつた。革靴がブカブカだつ  
たのだが多分お父さんとの間違えたのだらうと思つた。

あれ？俺なんでお父さんつて思つたんだ今までオトンつて言つて  
たのに・・・まあいつか。

そんな事を考えながらしばらく歩いていると前に一人の男子生徒  
が見えた。

「おーい、静流～」

「お、秋か今日ははええな、どうした

「いや、なんか妙に田代覚めがよくなつてよ

俺がそういうと静流は少し顔に笑みを浮かばせた。

「よかつた、よく眠れたんだな。あんな事があつたから眠れない

かと思つてたんだけど。それにしてもお前妙に顔赤くないか?」「

「あんな事? 昨日なんかあつたつけて?」

「は? お前何いつてんの昨日女になつたつて騒いでたのはどいつだよ」

まさかだつてあれば

「つや、そんなあれば夢だろ。清流までどうしたんだよ。俺が見た夢と同じ夢を見たのかよ、すごい偶然もあるんだな。やついえばお前身長急に伸びてないか?」

俺がそういうと静流は手を額に当たしてあがやーつてポーズをとつ。

「秋、これを見ろ」

静流は鏡を取り出す。「イツ鏡なんて持ち歩いていたのかよ。俺がそう思つて鏡をのぞきこんでみると俺が映つているはずのところに美少女が映つっていた。

「何だこれ、新手のびつくりか? カメラはどこに仕掛けあるんだよ」

俺がそつとまわりを見るしぐさをしていると静流が俺の胸に手を当てた。

「ひやう」

その時俺は変な声をあげてしまった。

「なつ何すんだよ

俺が少しあわてていると静流が。

「まだ気がついてないのか。お前が夢だと思つていてのは夢じゃ  
ない、それはうつつだ」

「うつうつうつ・・・うつ・・・ああ現か、現つて  
いつとたしか現実つて意味だつたな。それはつまり・・・・・。

「ないつ、ないつどこへ行つたんだ俺の　　と　　は」

「おいつ、女の子がそんな卑猥なピーつとかの効果音で消えてし  
まいそうな言葉を叫ぶな、そこのうのサラリーマンがこいつを見てい  
るじやんか」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ。俺はしばしの間放心状態  
になつた。その時あたりが次第に明るくなり始めた。

「おつ、晴れてきたな」

静流がそう言つたのを命図に俺が放心状態から回復して目をあけ  
るとそこにはまばゆい世界が広がつていた。

「うつ、まぶ・・・じ」

「えつ、あつ」

静流はそう言つてから学ランの上を脱いで俺にかぶせた。

「なつ、何すんだよ

「お前日光過敏症だろ。あんまり日ひあたるんじやねえ

「うだ、しかもお父さんは重度のひ言つてた気がする。まさか命にかかるのか?と俺が思つてこると。静流が急に俺を抱き上げ。

「学校まで走るが

と黙つてそのまま走つて行つた。俺はそれるままになつていた。

## 第七話 目覚めの良い朝（後書き）

小説を書いてるときにふと気がついた事があります。それは・・・  
チャック全開じゃつたわ／＼／www

感想や修正点などあつたらお願ひします。

## 第八話 僕の居場所

「ゼニゼニ」

「静流大丈夫か？」

静流は明らかに疲れ切っていた。まあそりゃ俺を担いだまま数百メートルも全力疾走してたからな。

「全く、ゼニ、問題、ゼニ、ない」

「多分誰から見てもお前は今疲れきつてると思つだぞ」

しかし流石陸上部。30秒ぐらいで呼吸を整えた。

「で、どうするんだ？まずは・・・普通に考えて職員室に行く事だよな」

俺は結構しんどそうに歩いた。これから起こる事を考えたらしんどく思わないほうがあかしい。一人の女の子が学ランを着て昨日の朝起きたら女になつてましたなんて誰が信じると思つ？俺だつて信じられないよ。

俺は下駄箱の前まで來てある事に気がついた。俺の下駄箱は一番高い位置になり男のときでも少し手を伸ばす必要があつた。それがこんなに小さくなつたらどうなると思つ？届くわけないじゃないか。俺が困つていると。

「やつぱりな、手が届かないんだろ。とつてやるよ」

静流が来てくれた。こいつって女視点からみると結構イケてるやつじゃないか。俺が女だったら惚れてるかもな。おっと、あくまで女として生まれていたらだからな。

俺は静流がとつてくれた靴を履いて職員室に向かつ途中に、担任に遭遇してしまった。

「おや、君は秋次く、秋さんね。事情はお父さんから聞いているから安心しなさい」

え？ お父さんが。あの人ナイスだな。

「とりあえず、これが出来るから更衣室で着替えるといいわね」  
先生がそう言つて一つの箱を渡してきた。何だこれ？ 俺はそう思ひながら箱を開けてみると中に入つていたのは女子の制服だった、俺が通つている学校は男子は学ランで女子はブレザーでおまけに超がつくほどのミニスカだ。俺がそれを見ているとある事に気がついた。

「え、まさか。これを着ひなんて言ひませんよねえ？」

「何を言つてるの、これ以外に何があるつているの。はい、これ女子更衣室の鍵と制服と一緒に届いたものがあるわ」

「えつ、ちよ、俺が女子更衣室を使うのはまずいんじゃないですか？」

「何いってるの、可愛い美少女が女子更衣室使つて何がいけない

の？」

たしかに今の俺の体は女だが中身は男だぞ。って言つても無駄か。それにしても一緒に届いたやつって何だ？俺がそう思つて開けてみると中にはパンティーなるものとかにも女子が着るようなヒラヒラしたシャツが入つていた。つまり、これを着るという事か。

「そういう、お父さんが秋さんは今日休むつて言つてたけど結局来たの？」

お父さんが今日は休むつて言つたのか。なんでだ？俺はそう思つがわからないのでとりあえず女子更衣室で制服に着替えることになった。ブラとかはなかつたのでホックの心配はなかつたがいろいろと女子の制服を着るのには抵抗があつた。それになんでこんなにミス力なんだよ、靴下が通常のサイズで足がめっちゃ露出しているのだが気温は低いので物凄く寒かった。俺は静流が更衣室の前で待つていたので早めに出了。すると静流が俺の体中を良く見てから。

「すっげ、可愛いなお前

「可愛いとか言つたな、この服装はめっちゃつらい。羞恥心とかめっちゃスースーして寒いし」

俺は静流に可愛いと言われたときに体が物凄く熱くなつた気がした。まさか俺は照れているのか？いやそんなことはない。これは、そう・・・ただ恥ずかしがつていてるだけだ。

俺は着替えた後に職員室に戻りそのまま朝のHRまで待機しHRクラスの皆にうち明ける事になつていた。

「それじゃあ秋次ぐ・・・・じゃなくって、秋さん入って

俺は先生に呼ばれ教室に入る。事情等はあらかた先生が先ほど説明してくれたので俺は説明する手間が省けた。俺はゆっくりと教室に入ると皆の間でじよめきが起きた。どうせキモイとか言われてるんだろうな。つい先日まで男だったやつが急に女になつてゐるんだもんな。そう思わないほうがありえな・・・・。俺がここで頭の中で言つてゐる事を遮つたのは女子達の言葉だった。

「キヤー、可愛い。」に向いて

とそれに続き男子が。

「秋次、じゃなかつた秋ちゃん俺と飯を食おうぜー

とか言つてゐやつがいる。またかここつらは。

先生が俺の考へてゐる事を呼んだよつて。

「どうやら、彼らは貴女の事を受け入れてくれるみたいですね

俺はそれが嬉しかつたが勘違いだつたらいやなので一応聞いてみることにした。

「あの、皆は・・・俺の事、受け入れてくれるのか?」

俺が聞くと皆は「当たり前だろ、お前がたとえありんこになつちまつても大切な友達だよ」とか「秋次君は、女の子になつて名前が

変わつても私たちのクラスメイトだよ」とか言つてくれた。

俺はうれしくつて泣いてしまつた。そして男子から女子まで皆が俺の周りに集まつてきてこれからも宜しくなとか言つてくれた。

「皆、ありがとう」

「秋ちゃん、泣くなよ」

静流がそう言つてハンカチを渡してくれたので俺はそれで涙をぬぐつた所で。

-----  
ガラツ-----

扉が急に開き皆がそつちを見るとそこには一人の男がたつていた。

「お、お父さんどうしてここに

俺はそつ言つた。

## 第九話 僕って鈍い？

そこにはお父さんがたつていた。

なぜここへと思つて聞いてみたとするがそれは遮られた。

「全くお前は、熱が39・5度もあるってのに良く普通に学校来れたな」

「へ？」

39・5度って普通相当つらいはずだが・・・・。もしかしてさつきまでの体が熱いと思っていたのはそれか。僕ってそんな鈍くなつてたんだ。39・5度と聞いてクラスがざわざわしている。

「今朝帰つてきたと思つたらお前が風呂場で倒れてたんだよ。多分のぼせたんじやないか一応体温測つてみたら39・5度行つてたんだよ

お父さんがそう言つてそのあとに静流が僕のデコに手を当てた。

「えーっと・・・・ってあつつう。お前良く普通でいられたな。これは相当やばいぞ」

僕も自分のデコに手を当ててみるとからだじゅうが熱くなつていたからよくわからなかつた。

「あの先生、今日は早退をせたいんですけどその際に静流君をお借りしたいのですがよろしくでしょうか？」

「ええ、良いですがどうして静流君なのですか？」

お父さんと先生が聞くと。

「静流君は家が近いのでいろいろとこれから世話になると毎つの秋の事についていろいろと話しておきたいのですよ」

「そういう事なら了承しました。静流君、あなたは良いですか？」

「はい、俺は大丈夫です」

そして俺と静流はお父さんが運転する車に乗つて俺の家に向かう。車に向かうまではあまり無理させないためにと静流が俺をおんぶしてくれた。あいつにはそのうちたくさんお礼しないとな。俺はどうやら車に乗つっているうちに眠つていたらしく気がつくと俺の部屋の俺のベッドで寝ていてその時には一人の話も終つていたらしく静流は学校に戻つていた。

「俺、これからどうなるんだろうなあ

と呟いてみるとむなしく何も帰つてこなかつたし俺はずいぶん疲れていたのでもう寝ることにした。

どれくらい眠つたのだろうか、お父さんに起こされ俺は体温を測り平熱（男だった時の）になりそれを確認してお父さんは話始める。

「お前こは病気の事を重度と言つておいたはずだが覚えてるか？」

「うんまあ

多分日光過敏症の事だろう俺は返事をする。

「その事なのだが、お前をだましていたよつて悪いんだが本当は軽度なんだ。重度と言つておいて静流君がどれくらいお前の事を思つて行動してくれるか調べておきたくて彼にどう対応したのか聞いたが彼はやさしい人だな。俺は秋を彼になら任せていいくと思つているぞ」

その言い方結婚するみたいな言い方なんだが、そう聞こえるのは俺だけだろうか？

「他には、まああまり長い話もなんだ、何かあつたら彼に甘えるといい。それだけだ、あと今日愛華が帰つてくるからこそ」

愛華と言つのは俺のアネキで今高校3年だったはずだ。遠い学校で寮生活なのでお正月と黄金週間とお盆とあとまたに気が向いたときくらいにしか帰つてこない。たぶん俺の事を聞いて帰つてきたのだろう。俺が今相当恐れていていたのはアネキの帰還だったのかもしない。俺のアネキと言うのが物凄くブラコンで俺が小さな時はいろいろやられても少ししか抵抗できなかつたが最近ではもう簡単に逃げ切れたのだが・・・・・多分今では何の抵抗も出来ないのだと思われる。

「ははは、そんな顔するな。愛華に女の子としての常識をいろいろ聞いてみれば良いだろ」

「うーん、正直言つて怖いかもなあ。まじで今の俺になら何されるかわからないし」

俺は出来る限り武器を準備しておこうと思った、まあ俺のアネキは見た目は華奢なのだが異常なほど体が丈夫で俺が一番驚いたことは3階のベランダから飛び降りて普通に着地出来た事だった。本当にあれは人間か？何かの間違いで生まれてしまった魔神とかではないのだろうか？

俺がいろいろと考えていると玄関の扉が開く音がして。ツイーキヤガツタと心の中で叫び絶望を味わっていると。帰ってきたのはお母さんだった。心臓に相当悪い・・・。

結局その日アネキは帰つてこなく俺は風呂に入つてすぐベットにもぐりこんで睡眠に入る。まだ風呂とかにはなれるのに時間がかかると思う。自分の裸を見て鼻血が出てしまったのはだれにも言えない事。

次の日の午後1時に誰かが水木家の家に入る、そしてその誰かはまっすぐに俺の部屋に入ってきて俺にゆっくりとちかずいてくる。俺は寝ているのでその人影に気がつく事が出来なかった。

## 第九話 俺つて鈍い？（後書き）

なんだか一日間みてなかつたらお気に入り件数が一気に増えていて驚きましたwww  
もしよろしければ、この小説は一話一話がもつすこと長い方がいいなどの要望が当たつたらお願ひします。

## 第十話 柚木と静流の話（前書き）

「ここにちは先ほど一家の窓ふきとカーテンの洗濯などが終り全てセツトし終わったところです。今回は秋が寝ていた時のお話、いわゆる外伝ってやつですね。

ところでアクセス解析の話別を見てみた所まえがきをすつ飛ばしてみてる人が結構いるようですね。俺は基本まえがきを見る派ですが皆さんははどうですか？

## 第十話 柚木と静流の話

「それで、俺に話と言つのは？」

俺は秋ちゃんのお父さんに話があるとのことで今秋ちゃんの家にいる。

「何から話したらいいものか、俺はあまり他人に説明するといつ事が苦手でね。とりあえず病気の事について話しておくれべきか」

「日光過敏症ですか、重度・・・なんですよね？」

俺がそう聞くと秋ちゃんのお父さんは少しいいへんづつ。

「その事なんだが実は軽度なんだよ」

「え？」

「重度と言つておけば君は心配するだらう。それで君はどれほど秋の事を思つてこるか調べさせてもらつたんだ。まあ、君なら大丈夫だらう」

なんか、いつの間にか試されてたらしい。

「あと、秋はいろいろとあつて精神状態は隠しているが相当不安定だ、それに今まで男として生きてきたわけだから女の事なんてわからないだらう。だから秋は今性別の面で赤ん坊みたいなものだ。そんな無防備な状態だとあんなにかわいい容姿だ、絶対にヘンなやつに絡まれたりするだらう。だから頼む身であつて勝手な事だと思

うが秋を守ってくれないか？男であり今まで男であった君が男として秋に接してあげればそれでも秋が自分自身で解決するよりもくになるはずだ。俺から言いたい事はこれだけだ、頼まれてくれるか？返事は今じゃなくていいが

俺はもう決めていたし覚悟はあった。あれほどまでに強かつた秋次は、今とても弱い秋ちゃんになっている。それはまるで極薄のなんの補正もかかっていないガラスのように脆いものだ。

「俺が手を出せる範囲。いや、絶対に秋ちゃんを守ります。彼女が一生を共にする、彼女を一生かけて守ってくれるという人が現れるまで俺が守りきつて見せます」

「そうか、ありがたいな。案外君が秋を一生かけて守ってくれる人なのかもしれないな」

「なつ、何言つてんですか。俺は彼女を恋愛対象ではみていませんよ」

この人は急に何を言い出すんだろうか、別に俺は秋ちゃんを恋愛対象として見てなんかない。たしかに秋ちゃんは可愛くて結構素直だし小さいし（？）声も綺麗だしよくよく考えてみたら俺の好みストライクじゃないか・・・・・つて俺は何を考えているんだ。

「とととととにかく俺が出来る範囲で守りますから心配いらないです」

「そつか頼もし」

-----ピロロロロロ、ピロロロロロ-----

と秋ちゃんのお父さんの声を電話が遮る。

「うと、すまんなじゅつと待つてくれ」

秋ちゃんのお父さんが受話器を取りそれを耳に当て。

もしもし?

『あり、おとーさん? 私私』

・・・・・新手の私詐欺か、切りますよ？」

『つちよ、ひどい。この愛娘の声を忘れるの早くね？そーそー、メール見たよお。そうだ今帰つてるから』

秋ちゃんの姉さん相変わらず電話だと声が大きくなるな、一応俺との面識があるがもう忘れてるだろうな何しろ小2のときには会つたつきりだからな向こうはもう忘れてるかもな。

「お前はいちいち声が大きくてだだ漏れしてるし話の転換が早い」

『もうひ、それぐらいいよいよじゃん。それでさ、秋次の事なんだけ  
ど・・・』

「それはお前に実際に目で見てもらいたい」

『そつか、秋次としては結構つらいんだろうな。私には何が出来  
るのかな。つてこんなシリアルに考えてても仕方がないよね。今まで  
通りに接してあげるそれが一番だよねやつぱり・・・・・・私ま

だ諦めてないかも』

『愛華・・・それはつまり秋に打ち明けたいって事か、だが今は駄目だそのうち秋も今の状況を受け入れるそしてその内慣れる、その時まで駄目だ。それに打ち明けても今じゃ・・・お前はそれでもいいのか?』

『何を話しているのだろう途中からシリアルになつていて、気がなるけどそれは俺が入り込んではいけない事なんだろう。』

『そつか、今はもう秋次じゃなくて秋か。お父さん、私はあきらめないから今だって』

『そつか、じやあもう切るな?』

『うん、またね』

・ - - ガチャ - - -

『すまんな、長話で待たせてしまつて』

秋ちゃんのお父さんが俺に話しかけてきたので俺は返事をする。

『いえ、大丈夫ですよ』

『それで、話の途中からのないようだが多分君にも聞こえていた  
だろう・・・忘れてくれ』

『はい、そのつもりです』

「本当に、君が秋の親友でよかつた。さあ、そろそろ学校へ行かないとまずいだろ？ 最後に一つだけ言いたい事があるそれで終わりだ」

「何だ？ 俺は静かに聞く」と云ひ。秋ちゃんのお父さんが話し始める。

「……………頼めるか？」

「はい、やつを誓つたばかりですかから任せとけ」

「本当に迷惑かけてばかりだな」

## 第十話 柚木と静流の話（後書き）

なんかちょっとシリアルになっちゃいましたね。まあそれは良いとして。中学編に切り替わったわけですがやっぱり次話かその次あたりから中学編にしたいと思います。とりあえずその話が出るまでは今の位置にしておきます。

## 第十一話 アネキの帰還（前書き）

なんか今回はずいぶんと文脈とかがぐちゃぐちゃになってしまった  
ような・・・・・つと愛華の詳細書かなくては。

水木 愛華

秋の姉でプラコン、今はシスコン。体は丈夫で3階から飛び降り  
ても無傷らしくそのくせ結構な美少女で（秋には負ける）ラブレタ  
ーなど日常茶飯事だが中身を見た事は一度もなく全てその場で切り  
捨てている。

## 第十一話 アネキの帰還

朝俺が起きると一人の女が俺のベットで一緒に寝ていた。普通の男だったらなんという幸せだあああとか思つんだらうなご生憎俺は普通の男じゃないといつか今となつては男じゃない、それにその女と言つのは俺のアネキだつたというオチで俺はアネキが起きないようにやううとベットから出ようとしたとき俺はなにかが足に引っ掛かり転んでしまつた。

「いつてえ、なんだこれ？」

俺がそれを見ると手で俺が危つて恐怖で失神しそうになつたところでの手はアネキの手だつた事に気がついた。

「ふふふ、逃がさないわよお」

アネキが転んで倒れていた俺の上に馬乗りになる。

「ひょい、アネキマジで重いからびこてくれ

「へえ、今じゃもう私をどける事も出来なこのかあ。どうひょううかなあ～襲つちやおうかな～」

マジで危険だ誰か助けてくれ　と心の中で呟ぶとやの願いがかなつたのかお母さんが登場した。

「あらあら、朝つぱらからこりやあけこりやしきつて、やうだ運華が帰つてきた記念に写真撮つやけりましょ」

助けてくれねえのかよ、しかも記念つて。

結局俺は苦しい為涙田の状態でとられてしまった後で見せてもらおうかと思つたが自分の無様な姿を想像してやめておいた。

「それにしても本当に美少女だね、秋」

「う、うん。あんまうれしくねえナビ

「はあー、口調が男のまんまじゃん」

アネキは少し考えた後に再び口を開く。

「よひじ、じの際口調の」ともビリビリかしなことね

「いや、『も』ってなに。一体俺に今何を何すんだよ」

「秋、朝ご飯食べたら特訓よ」

「だから何の特訓だよ」

結局アネキは俺の問いかには答えてくれずに朝ご飯を食べ始めてしまつたので俺も食べ始める。そういうえばもう俺が女になつてから3日もたつているのかと思いつながら焼いたパンを食べる。

「よし、秋食べ終わつたね?」

「いや、俺まだ一口しか食べていないし」

たしかに前の俺だつたらもう食べ切れていたろう、今俺が食べ

ているサイズならだけど。結局俺は相当な少食で6枚切りのパンの半分でおなかがいっぽいになってしまつ。ただそれでも今の俺は一口が相当小さいので全然食べれない。そういえば昨日気がついた事だが俺は肉はどりやらチキンならおいしく食べられるようだ。結局アネキは俺が食べ終わる前に自室にもどつて数秒後にはもつ着替えで戻つてきていた。

「よし、ちよつと食べ終わつたわね秋。じゃあ着替えてらっしゃい」

とアネキが言つたので俺は着替えてくると。

「なにそれ、そんなんじや可愛い容姿が台無じじやない他に可愛い服とかないの?」

「いや、男が可愛い服とか持つてたらおかしいだろつてなに人のズボン下げてんだよこの変態」

「まったく、なんでこんな男物の下着つけてるのよ。あつそりだちよつと秋来なさい」

俺はアネキに連れられ、今アネキの部屋にいる。

「何探してるの?」

と俺が聞くと。

「私が小学生の時に来ていた服、よかつたあ~とつておいて。ほ

ら~」

とアネキがそう言つてとりだしたのはミースカや肩の出でている服だつたり。俺が着るのには相当な気が必要そうな服がたくさん出てきたまさかそんなものを俺に着せるのではないのだろうか?といやな予感がした。そういうえば誰かが良い予感は外れるが悪い予感は当たると言つていたなあと思つた。

「わあ着なセー」

「はあ?」

「だから着なさいって」

「拒否権は?」

「ナニソレオイシイノ?」

うわあ、この人知らないふりしやがつた。突然アネキは俺の肩をがしつとつかんだかと思うと一瞬のうちに俺を脱がしたつまり俺はいま一糸も纏つてない姿であった。

「なつ、何すんだよこきなり」

俺がそういうと。

「ほら、早く着なセー」

とアネキは俺にミースカを押しつけてくる。俺がいつまでも拒否つているとその内。

「ええい、もう無理せつやつてやる」

と俺は結局無理やり着せられてしまつたわけで。今女子用の制服を着せられた以上に恥ずかしい状況になつていて。服装は白いミニスカートに上はくわしい名前はよくわからん肩の出でいる服で今の季節の事を考へると。

「寒い、特にスカートが。なんで女子はこんな寒い時期にこんな短いスカートで大丈夫なんだよ」

「そりや見かけが第一だからよ」

「俺はそんなもの気にしない」

「可愛い子はおとなしく可愛い格好してなさい」

「断る」

「秋に拒否権はない、だ～か～ら～今度はこれ」

とまたアネキは瞬時に俺を裸にして今度はメイド服を着せた。

「なんでコスプレなんだよ」

と俺が突つ込むがアネキはそれが耳に入つていない様で。

「ああ、なんて可愛いの愛しのマイシスター」

まづい、重症だ。なぜこんな重症になつてんだと思ったが。多分俺が抵抗できるようになつてから俺を思い通りに出来なくなつて我慢するしかなくなつたんだろうな。そう思つとなんだか少しあネキ

がかわいそうに思えてきたので（ナゼ～）今ぐらこそ好むやせやつ  
やるか。結局その結論に至つて。

「で、今度は何を着ればいいんだ？」

「えつ？」

「今だけだから、今は好きにしていいよ

「いや、もういいよ。ほりこれ着て」

とアネキが最後に出してきたのはパーカーとやつぱりこれだけは譲  
れないのかニースカだった。俺はそれを着ると。

「じゃあ、秋買いうものに行くよ

「いいじゃん」

「ドーリーって買いうもの秋の新しい服買わなくつけ。や  
あ～どんな服が似合つかな」

前言撤回せつぱり俺逃げたいです。

## 第十一話 3人で買い物

結局、俺はなされるままになつていていた。

「わあ、天氣も素晴らしいほど曇りだし早速出かけよつ

アネキは一応病氣の事を知つてゐるのか。まあ、知らなかつたら知らなかつたで困るけどな。

「そだ秋、母さんとかの」とせむ母さんつて言つてゐるなら私の事はお姉ちゃんつて呼んでよ」

「やだ」

「拒否早、じやあ秋の服は露出度の高い奴に」

「Iの悪魔めえええ」

「ふつふつふ、いやなら私の事はおねえちゃんと呼びなされ

そういう言ひ方アネキは俺を持ち上げる。

「ちよ、ねねせえ」

「昔はいつやつてやつたら喜んでいたのに。お姉ちゃんの事嫌いになつちやつたの?」

やつていつてアネキは泣くふつをくる。

「だ〜、嘘泣きも駄目。いい加減おひせ〜」

と俺は力の限り暴れてみるがそれは無駄なようアネキはいつまでもおろしてくれなかつたがここで救世主が現れた。

「何やつてんだよ

と後ろから声がして振り向いてみるとには呆れた顔をして静流がたつていた。

「あつ来ててくれたんだあ、さつすが秋の彼氏だねえ。姉様の言つ事をちやんと聞くよお

「いや、彼氏じゃないし。で、俺はなんで呼ばれたんですか?」

たしかになんで静流を呼ぶ必要があつたのだろう〜俺がそう思つてみるとアネキが静流の耳元でなにかを囁いていたようだつた。

「なつ、違いますよ。そんな風に思つてませんから」

「嘘だねえ〜、だつて静流君嘘つくりて声が普段より微妙に低くなるんだよね。この私を欺けるとでも思つていたの?」

「良くそんな事わからん俺なんて全くわからねえぞ

と俺がそういうと静流が。

「まあ、お前こは嘘ついたことないしな

へえ静流つて俺に嘘ついたことなかつたんだ、それなら納得納得。

「べ、べつに秋ちゃんが聞いてもなんも面白くない話だから」と口で向の話をしていたんだろうと黙って俺が聞いてみると。

「そつか、そつこえはなんでちやんつけなんだよ。普通に呼んでくれないと違和感がすここんだが」

「いや、女の子を呼び捨てってのはどうかと黙つて

「静流君は恥ずかしいのよ」

まあ、それはわかるよつた気がする。俺も女の子を呼び捨てにすることは少し恥ずかしいような気もするしな。

「はつ恥ずかしくなんかない。それまで重いのなら呼んでやるつ、秋つつ」

呼んでくれたのは良いがなんで叫ぶ、そこで歩いてサラリーマンなんてびっくりして腰抜かしてる。それに呼ばれた俺の方が恥ずかしいだろ。

「わあ、早速買つものに行くか~」

アネキはそんなことお構いなしだ。俺と静流はそのあとついていく。

近所のデパートにつくとアネキが真っ先に向かったのは洋服店売り場だった。

「ほら、秋これ試着して。あとこれと、それと、これも

と、どんどんと服を渡されていく。俺はアネキの着せ替え人形だと勘違いされているんじゃないだろうか？

「静流、これどうおもつ？」

俺はまづ一着田を着て静流に聞いてみると、静流が少しフリーズした。

「変だよな、やっぱり。元男の俺がこんな可愛い服着てたら氣持ち悪いよな」

「いや、良いよめっちゃいい。お前可愛いよ」

「お、秋にあづちゃん。はい今度はこれとこれね

と今度は5着位おいていく。俺がそれを試着している間、ずっとアネキの姿がなかつたのだが試着が全部済んだあとにアネキがなんか棒みたんなものを持ってきて帰ってきた。

「はい、秋これ」

アネキが差し出してきたものの包装紙(?)をはがすと中から出てきたものは黒い傘だった。

「何この傘？」

と俺が聞くと静流が。

「それ日傘じゃねえの？」

「お、よくわかったね。つてまあそこの鈍い人が気がつかないだけか」

「鈍いって俺？」

と俺が言つと一人は顔を立てに振つていた。

結局俺の服を10着程度と下着を同じくらい買つてから俺たちは洋服売り場を出ていまちよつとゲーセンに呑みに来つている。

「俺を連れてきたのはこいつこいつわけか」

いま買つた物が入つてる袋など静流が全て持つている。

「文句言つなら秋に持たせる？」

「文句じゃない、だいたい秋はこんなのは持てないだろ？が」

「そりいえば秋の今の力つてどれくらいなの？」

そりいえば今の俺の限界に挑戦したことないからわかんないなあ。

「よし、これで測つてみよう

とアネキが指さしたのはなんか変なやつだった。棒みたいなものをもつて最初は軽いが時間が経つにつれて重くなりそれが地面についたときにどれくらいの力だったのか測るゲーム機だ。

俺がそれに挑戦することにした。結果。

「秒殺だね」

とアネキが言った通り数秒で俺は脱落してしまった結局それで俺の力は小学生並みらしいという事がわかつた。まあ体も小学生並みだしあまり問題ないかなと思っている。

「あれちょっとそこの自販機でジュース買つてくるよ

と静流が言ってアネキが私も行くよと言って俺は取り残されてしまった。俺はB I H A Z A R Dを見つけてそれをやろうとそっちの方に駆けだすと急に角から出てきた人にぶつかってしまった。

「いって~。あ、すいません

俺はぶつかった衝撃で転んだまま謝った。

「いやいいよ、それより君可愛いね。お兄ちゃんがおじつてあげるから一緒に遊ばない?」

と誘ってきた。ナンパってやつか?俺はあわてて逃げだそうとするが肩をがつちりとつかまれてしまい逃げ出せなかつた。俺は声をあげて助けを求めるようとしたが怖くて声が出なかつた。やっぱり俺女になつてから怖がりになつてると頭の超片隅で思い。そつとうまいと思つた時。

「ぐはっ

そいつが急に横に吹つ飛んでいき俺は解放された。俺は少しこで固まつていたがすぐに誰かが助けてくれたのだと思いその人を見

るとその人はあいつの顔を蹴った姿勢のままでいた。茶髪でリングをつけていかにも不良って感じだった。

蹴られたやつが起き上がり蹴った人の胸倉を掴む。

「てめえ何すんだよ」

そう言つと。

「嫌がる女の子を無理やり連れて行こうとするなんて下等生物がする事だ。その手を離せ下等生物」

と蹴った人が蹴られたやつの腕をつかんだかと思つとそいつを地面にたたきつけた。

「つてえ、畜生。おぼえてやがれ」

そう言つて走つて逃げていく。ずいぶんと古いアレだなと思つていると。

「大丈夫だったか?もう怖くなじよ」

と蹴った人が言つた。

「あ、ありがとうございます」

「気にすることなんかない。君みたいな可憐なか弱い女の子を守るのが男の役目だからな。俺は、つと名乗るのはもしまだ会えたらにじよ。じゃあな」

といつてその人はどこかに行ってしまった。

「あいつ誰？」

と静流とアネキが戻ってきた。

「わあ、でも悪い奴じゃないと思つ。助けてくれたし

「助けてくれたってなにがあったの？っとそろそろお昼時か。詳  
しい話はそここのファミレスでお昼でも食べながらにしようか」

とアネキが指を差したファミレスに俺たちは向かう。

## 第十一話 3人で買い物（後書き）

今回は少し長くなりましたがね。  
感想＆要望等どしどしあ願いします。

## 第十三話 俺が気がつかない変化（前書き）

もつすべ寝よつと迷つてゐるんで今回またがきとか短縮します。W.W

## 第十二話 僕が気がつかない変化

「ふう〜ん、つまりナンパされたって事か〜」

「う、うん」

俺はあの後にさつき起きた事を話した。なんだかアネキは面白そうにその話を聞いていた。静流はなんか心配していて「変な事されなかつたか?」とか聞いてくる。

「静流、大丈夫だつたつて何度も言つてんだる。お前は俺の母親かよ」

と一度言つとそれ以上しつこく言つてこなくなつたが今度はアネキが「初ナンパされる気分はどうだつた?」とか聞いてくる。マジでその話はもうやめてくれ。と俺が思つているとウエイターの人がなにかを持つてくる。

「ギガ盛りチョコレートパフェになります」

と今の俺の顔よりも大きいパフェを持つてきた。アネキはそれを嬉しそうに受け取りそれを一口食べる。

「つま〜〜」

と言つてゐる。俺は本来甘いものは嫌いだがあんなにうまそうに食べてるアネキを見ると味見程度に食べてみたいなと思つてしまう。前はいやだつた甘い匂いも今ではすごい良い匂いに思える。そうだ今の俺は前の俺と味覚が違うんだ。もしかしたら食べられるかもし

れない。結局俺は耐えきれなくなつて。

「アネキ、一口貰つていい?」

と俺が聞くと、アネキは嬉しそう。

「うーん、どうしようかなあ・・・・っとねうだつ今が秋と間接キスする絶好のタイミングか?よし、秋おねえちゃんが使つたこのスプーンでたべなさ」

とアネキが言い終わる寸前にウェイターが来て。

「申し訳ありません、こちらのパフェは大人用でしたのにスプーンが一つだけで・・・・。もうなんと謝ればよいか、今頃ですがスプーンをお届けにまいりました」

謝るのは良いんだが言葉がぐちゃぐちゃになつてゐるぞ。お届けつて何ぞ、普通お持ちしましたじゃないのか?それにどうやらアネキの怒りを買つてしまつたようだな。まあ流石にアネキでも他人を襲うような事をしないが怒りのまなざしで睨んでいる。ウェイターは幸運の事かそれに気が付いていない。

「一口頂きまあーつすつと」

俺は結局ウェイターが持つてきたスプーンを使ってパフェを一口食べると。甘い味と匂いが口の中で広がつて、アイスの部分がひんやりと冷たくつておいしかつた。どうやら俺は甘いものが好きになつていたようだ。

「秋頃が幸せそうだねえ、もつと食べる?」

「えつ、良いの？」

「おつけおつけ、静流君も食べる？秋がが使ったスプーンで」と姉が「冗談を言ひと、さつきまで寝ていたのかと思われる静流ががばつと体を起こすと。

「俺もぐ・・・・やつぱーい」

そうか、静流もあまり甘いものが好きじゃないんだらうか？俺がそう思つて一緒にアネキとパフェを食べ続ける。俺の顔よりも大きかつたパフェはあとかたもなくなつた。そして俺の腹は悲鳴をあげている。この事も考慮すべきだつた、甘い物の食べ過ぎでむねやけになりおまけに冷たい物の食べ過ぎでおなかを壊してしまつた。俺は結局そのあと腹が痛すぎたのでそこで解散となり帰りは姉におぶつてもらつた。

家に着き、いまだに俺は気分が最悪だつたのでもう風呂に入つて寝てしまつ事にした。俺は風呂場の手前の更衣所で服を脱ぎ。

「なんだかんだいつてもう慣れけやつたな」

と呟く、実際まだ1週間も経過していないが人間は簡単に慣れる動物だという事を実感した。でもさすがにこれは早く慣れ過ぎてないか？と思つた。実際これは慣れるのが早すぎで他にも俺が変化している事があつたが今の俺には知る由がなかつた。

俺が風呂に浸かっていると誰かが更衣所に来て脱ぎ始める。

「なつ、アネキ？俺今入つてるぞ」

「別にいいじゃない、久しぶりに一緒に入ろうよ」

とアネキは脱ぎながら言う。

「いや、久しぶりにとかじゃなくってそれはまずいだろ」

「まずくなんてないよ。だって、私たち姉妹じゃん」

う、そうだった。今の俺は女であるからして何も問題はないのだが、でも問題はあるのだ。そう思つてゐるうちに扉がガラツと開いてアネキが入つてくる。俺は運悪く入ってきたアネキの体全体を見てしまつた。俺は恥ずかしくなり顔を湯に沈める。

「最後に一緒に入つたのいつだっけ？」

とアネキが聞いてきた。たしかあれば7年くらい前の話だった気がする。

「多分、俺が小2の時だと思う

「そつか、もつそんなに立つのか・・・」

しばらく沈黙が続きアネキが浴びてるシャワーの音が響きわたる。その沈黙を破つたのは意外にも俺だった。

「ねえ、髪の洗い方教えてくれない？」

「お、任せで。お母さんは教えてくれなかつたのか」

「うん、流石に、ね」

「じゃあ、いつに来てよ」

とアネキは手招きするので俺は湯船から出で立つの方に行く。

「秋は体も髪も綺麗だね

「ありがと」

「ふふつ、本当に綺麗だよ。あの傷も・・・なくなつちゃつた  
んだね」

とアネキが悲しげに言つ。俺はそれを聞いて腹部を見てみるが本  
当に傷がなかつた。その傷といつのは俺が小さいときに何かで怪我  
をしてしまつたらしい。どうやらその原因がアネキにあるらしく今  
も気にしているらしい。ちなみに俺はその時の事はもう覚えていな  
くどうやつて怪我をしたのか覚えていなかつたし誰も教えてくれな  
かつた。

「それにしても、ムダ毛の一本も生えてないね、それにホクロす  
らない。きれいすぎてちょっと不気味かも」

たしかにそれは少し不気味かもな、でも綺麗なのは良い事なのだ  
ろ」と思い俺はこれでもいいと思つた。

そして俺はアネキに髪と体の洗い方を教えてもらい。風呂から出る前にアネキに抱きつかれたときにそれから少しの間パニクつてしまつたが布団に入つたら安定した。

## 第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・(前書き)

今日はギリギリその日のうちに投稿できましたね。そつとねえば F a t e z e r o を今見ているけどまだ面白さがよくわからない様な気がする。と神様のメモ帳 DL おわた。よし明日は友達に進められていたはがない DL しよう。

## 第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・

今俺とお父さんとアネキの3人で駅のホームにいる。

「やれやれ、もう行つてしまつのか

「うふ、今回は秋の様子を見に来ただけだったから。お父さんは体に気をつけてね、あとはお母さんに宜しく頼んだよ。最後に秋」

「なんだ?」

俺はアネキに呼ばれて返事をして少しアネキに近づく。

「秋は父さんや母さんのことをお父さんとお母さんって呼んでるんだって?それなのに私だけアネキじゃやだから今度会つたら一番最初にお姉ちゃんって言つてね。それともう少し言葉をと行動を女の子っぽくしなさい」

「女の子っぽことかわかんないけど」

「自分がどんな女の子が可憐こと思つか、その思つた事を田指せばいいんだよ。お正月にまた会えるけどそれまではバイバイだね。じゃね、秋

俺は最後にアネキに抱きつかれた。アネキに(普通の状態で)抱きつかれるのは慣れているから俺も抱き返した。

「じゃあね

と俺が言つとアネキは名残惜しそうに腕を離し、手を振つて電車に駆け込みアネキが入つてくるのを待つていたように扉が閉じる。俺も手を振り返し電車が見えなくなるまで見つめていた。

「や、秋。晴れないうちに帰ろつか」

「うん」

今日も運よく曇りだつた為日傘は必要なかつた。しかし午後から晴れるというので俺たちは急いで帰ることにした。お母さんは今日も仕事だつた為アネキの見送りは出来なかつた。今頃だけ本当にお父さんは何やつてるんだらうと思つ。

俺たちが家に帰る途中に静流に会つた。静流はどいやら午後暇だつたらしく俺は家に連れ込んだ。俺は静流を自分の部屋に入れるべきか躊躇つたがいざれば入られてしまうだらうと思つ入れることにした。なぜ俺が出来れば入れたくなかつたのかというと、実は俺の部屋は姉の手によりたつた一夜で男の部屋の面影なんて何もない完璧に女の子の部屋と化してしまつた。

「静流、一応心構えをしておけ。男が入るのには相当つらい事になつてゐるからな」

「ああ、わかつた・・・・いくぞつ」

静流が俺の部屋の扉を開け俺の部屋の全容が視界に入ったところで止まる。

「・・・・部屋間違えました」

と静流は何事もなかつたよつていつて俺の部屋から出て行つうとする。それを俺は慌てて止める。

「間違えてないから、言つただろお姉ちゃんにあんなんにされたつて」

「いや、でもあれは男としては抵抗があるだ。ん、お前お姉ちゃんなんて言つてたつ？」「

その事か、俺は答えよつとする。

「ま、正直ジーでもいいんだだけjee。マジでこの部屋入らないとだめ？」

「うん、だめ」

俺がそう言つと静流は諦めたのよつか俺の部屋に入り床に腰掛けゐる。

「で、何やる？ 生憎W いはないからP 3な

俺はそつこいながら2人プレイが出来るソフトをどんどん出していく。静流はB I H A N A R D を選び一人でそれをやることにしてた・・・・・が。

「秋、怖いなら別のでもいいぞ？」

と静流が言つてきた。

「べつ、べつにわゆがつてんなんかあねえよよ

と俺は言い返す。

「そんなに手が震えて汗たらたら流していちいち敵が出てきたらびくつている状態でそんなこと言われてもな」

実際俺は今静流が言つたような状況だつた。前は「ふはははは、このザコ共があ～」とか言いながらショットガン撃ちまくつてたのに、どうやら女になつてそれも駄目になつてしまつたようだ。俺がぎつぎりな思考の中そういう考えていると急に出てきた虫型の敵に驚いてしまい。

「キヤツー？」

と私は静流に抱きついてしまつた。

「うわっ、こきなじうした秋

「う、じめんなさい私怖くつて

と私は慌てて静流から離れる。

「秋、言葉が・・・」

「えつ～どうした俺なんか変だつたか？」

「いや、やつぱ氣のせいだ」

どうしたんだろう、静流がずいぶん焦つてるような気がする。俺が静流の顔を見ると少し顔が赤くなつてるような気がした。この部

屋暑いか？もしかしたら暖房が利きかれてるのかもしないと思つて俺は設定温度を下げることにした。

「ちよつと設定温度下げるな？」

「え、 なんで？」

「なんだつて、お前熱くないのか？顔赤くなつてるが？」

と俺は言つ。もしかしてこいつ熱でもあるのかと思つたが多分違うだろ？と思つたけど一応確認しておくか。

「お前もしかして熱でもあんのかちょっと見せてみひよ」

と俺はちよつと静流のおでこに俺のおでこを当てる。なぜちよつするのかといつと手で触つてみるよりもわかりやすいからだ、俺がおでこを当てるとき静流はめちゃくちゃ熱くなつていてる事がわかつた。

「お前めつちや熱いぞ、大丈夫か？すぐに帰つたほうがいいだろ」

「やうだな、じゃあ俺もう帰る」

とじぼとぼ歩いて行く静流を俺は見送り自室に戻りなんか妙に疲れたような気がしたので俺はそのまま眠ることにした。

## 第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・（後書き）

感想や要望 etc . . . いろいろとお願いします。

## 第十五話 仲間！（前書き）

神崎 稔  
かんざき みのる

クラスメートの男子。容姿はイケメンで中身はオタクで下ネタを良く言う為にまったくもってモテていない残念な人。ちなみにオタク部・・・じゃなくてアニメ研究部だ。

氷室 弓狩  
ひむろ ゆかり

クラスメートの女子。委員長で大人っぽく結構モテている、人一倍頑張り屋で負けず嫌いもある。2年にして弓道部のエースだ。

## 第十五話 仲間！

気がつくと朝だった晚御飯は食べなったんかいと言われそうだが実際俺は晚御飯を食べなくてもおなかがすかないのだというかこの体になつてから疲れている時は食べるのもつらいのだ。それゆえ俺は晩御飯を食べずにして寝ていたわけで、つと俺はだれに言つてのだろうか？と思しながら時計を見てみると案の定、まだ早朝だつた俺が男のときはこの時間に起きるなんてありえなかつたしな。俺は一度寝をしようと思ったが全く眠くならなかつたので俺はもう着替えて学校に行くことにした。

「うわっ！」

俺は制服を取ろうとベットから降りて歩きだしたら床に置いてあつたバッグにつまずいてしまった。受け身を取ろうとするが腕に力が入らなくビターンと倒れてしまった。俺は無言で起き上がり制服と下着を手に取る。この体に慣れたと言つてもやっぱり男としての意識はなくなつたわけでもなく少しながら興奮してしまう。自分の体を見て興奮するなんてどんな変態だよと思しながら俺は着替え日傘を忘れずに学校に向かう。

始めは日が出ていなかつたが途中から出てきたので俺は日傘をして登校した。まだ早かつたので誰にも見られなかつたのは学校までの道だけで学校に入ると朝練をしている人がたくさんいた。通り過ぎていく人がみな俺の事を凝視していくのはあまり気持ちのいい事じやなかつた、中には俺の胸を見て行く変態な男がいると思つたら女で見て行く人もいた。

男のときはあんまり感じなかつたが、女だと結構相手の視線とか

がわかるのだ。

「誰だよあの女の！」

「めっちゃ可愛くね、うちの学校にあんな子いたの？」

「日傘差してるけどかのお嬢様かな？」

と通り過ぎていく人たちがそんなような事を話していた。俺は煩いなと思いながら教室に向かっていく。教室のドアを開けると一番乗りだ、と思ったが先に来ている男子が一人いた。確か、名前は・・・。神崎稔といったか、見た目はイケメンなのだが中身はオタクとこの理由でモテでない結構残念なやつである。

「あつ、秋ちゃんおはよ！」

と稔が挨拶をしてきたから俺も挨拶をするとした。

「あ、おはよう稔。それとちゃんと付けはやめてくらいいか？」

「あ、うんわかった。でも本当に君って可愛いね」

「きなり何を言い出すんだこいつは俺に可愛いとか。一応俺は男だつたわけだから気持ち悪いと思つてしまつ。

「可愛いとか気持ち悪いからやめてくれないか？」

「君が男言葉をやめてくれるんだつたら良いよ？」

「いや、なんでそういうんだよ。お前が勝手に呼んでんだから」

「うーん、じゃあ・・・デートいつか」

「ふざけるな〜」

と俺は叫んでいた。その声に今入つてこよつとしたクラスメートの女子が驚いていたのか眼を丸くしていたが。

「稔君、なに秋ちゃんいじめてるのよ。男が女の子をいじめるなんてサイテーよ秋ちゃんあつち行こ！」

と俺はその女子に何故か女子トイレに連れて行かれた。

「ねえ、ここ女子トイレだよね？俺が入つて大丈夫なの？」

「えつ、問題ないでしょ」

「うんうん、秋ちゃん女の子だし」

はあ、完璧にもう男として見られてないな、確かに少しでも男として見るという方が無理な事だ。

「秋ちゃんに言つとく事があるんだけど、これからはトイレは女子トイレ、着替えは女子更衣室ね」

「え、俺が使っちゃつていいの？」

普通元男なやつがそんなとこにまじつたら何をするかわからないとか言つ理由で一人だけ別のところのとこと思つたけど。

「うん、秋ちゃんがいない間に皆で話し合って・・・ほら皆秋ちゃんを受け入れるって言つたでしょ、だから出来る限り一般の人として秋ちゃんにとつてはつらいかもしないけど一般の女の子として扱う事にしたの。それで秋ちゃんが元男つていうのを知つているのはクラスの皆だけ。それ以外の人は秋次君は転校して代わりに秋ちゃんがこの学校に来たつて設定になつてるから秋ちゃんも気をつけてね。例えば言葉使いだけど出来る限り男でも女でも違和感のないようにして一人称は私だと難しいかも知れないから僕とかはどう?」

「眞俺の事をずっと考えててくれたのか?」

「あつたりまえでしょ、大切なクラスメート・・・仲間なんだから。それに稔君も秋ちゃんを怒らせる事を言つたかも知れないけどそれが彼なりの秋ちゃんへの思いやりなの。あんなふうに言われたら秋ちゃんだって言いたい事言い返せるでしょ?だから彼の事をちゃんと相手してね、さつきは私も秋ちゃんの為だつて気がつかなかつたけど。だから安心していいんだよ、何かあつたら私たちに甘えても良いから仲間を頼つてね」

そうだ、今思い出したけどこの人はうちのクラスの委員長の氷室弓狩だ。皆本当に俺の事を心配してくれていたんだ、なんだかとても嬉しかつた。無意識のうちに涙を流していた俺を抱きしめてくれた弓狩さんは温かかった。

## 第十六話 口算の戻題（前書き）

昨日は投稿出来なくつてすいませんでした、いろいろとあったもんでwww

とりあえず「メリクリ」とでも言つておきましょうかね。

山田 太郎

クラスメートのMOBキャラつづつーーー以上つづつーーー

## 第十六話 日常の再開

あの後は、普通に教室に戻った訳だが穢以外は怖いほど普通に接してくれた。あくまで俺にとつてだけどな。普通は男は男同士であつまつて女は女同士であつまつて話をしたりするだろ？だけど俺にとつての普通は男と話す事があるので男たちの中に女の子が一人混じっている状況で女が苦手な男は俺だとわかっているが上手く話せないやつとかもいた。まあそれは俺にもわかる。普通男は女と話す時少しながら緊張する、だからだ。

朝のホームルームが始まる前に静流がギリギリで教室に入つてくる、朝練がある為、静流はいつもそうだつた。本来は俺も野球部で朝練があるのだがこんな事になつてしまつていいのじばらく休ませてもらつている。

「おはよう静流」

「え？ああ、なんだ秋か」

「なんだとはなんだ」

俺が声をかけると静流はそう返してきた。

と俺が聞くと静流は汗を拭きながら。

「いや、女子の声でいわつされたから誰だつて思つてさ。普通挨拶されないじゃん」

ああ、なるほど。でもな静流お前はたぶん勘違いを一つしている。

お前が声をかけられないのは女子がお前に声をかけるのが恥ずかしいからなんだよ。こんのリア充めつ、つと前の俺は思つたかもしないが今の俺は女な訳で正直そつ思わなかつた。まったくもつて理由がわからんのだが……。

それでだ、今頃すぎるのだが俺は今日テストがある事を知つた。小テストとか確認テストとか生易しいものではなく定期テストだつ！俺はまったくもつて忘れていたから勉強していない。そもそもこんなことになつても冷静に勉強出来る奴がいると思うか？いや、絶対いないね、もしいるのなら俺はこの場で命を捨ててもいい。そんな事で俺は全く勉強していない。幸いにも俺の前の男子、名前は山田太郎だ。そいつに今回の範囲の問題とかをまとめたノートをパ一と見させてもらつた。結局そんなんでまとめて勉強出来ないまま1時間目が始まろうとしている。さつき見せてもらつた問題がそのまま出たとする。けどパ一と見ただけじゃ普通覚えられないだろ？まあ探学園の瞬間記憶能力でもあれば別だがな。テストは受けける前から悲惨な事は検討がついた。

「秋、そんなにうなだれるなつて」

「お前はいいよなあ、俺はこんなことになつて勉強以前の問題だつたんだぞ。お前が女になればよかつたんだあ」

「俺が女になつても惚れるなよ？」

「惚れねえよ」

結局、最後の休み時間もこんなバカな事をして過ごしてしまつていた。

1時間目は理科の問題だつた、テストを配つてるときも俺はうなだれていたが用紙が回つてきてそれが目に入った瞬間に俺は意識が戻つてきた。あれ？ ほとんどわかる？ なんとさつきの山田のヤマが恐ろしいほど当たつていたのだ。そのおかげで俺はほとんどの問題が出来た自信があった。しかし、この体は記憶能力もいいのか。それはこの先とつても嬉しいな、だつて少し勉強するだけで頭に入るんだ。この後のテストも簡単に解けて昼休み屋上で昼飯を食べている。学校の屋上が開いているのはアニメや漫画の世界だけのはずなのだがこの学校は昼休みのときは開放している。おかげで俺と静流はいつもここで昼飯を食べる事が出来た。今日もここで食べているのだが窮屈だつた。何故かというといつもは俺と静流の一人だけなのだが今日は学校中の非リア充の男という男が入れるだけ屋上にあつまついて俺は物凄く話しかけられた。

「君名前はなんて言つの？」

とか

「彼氏とかいるの？」

とか

「元つつつ」（？）

とかいろいろと話しかけられてしまつた。どうやら静流も質問攻めにあつてるのかと思ったが。

「反則だつ！」

「抜け駆けは万死に値するぞ」

「裏切り者には死あるのみだ静流を処刑しろー」

とかいろいろ責められてくるようだつた何故だかは全くわからな  
いが。俺は静流にもう何度も助けられているのでこいつでちよつと  
助けてやるつと思つた。

「みなさん」「みんなさー、私は彼氏と一緒に教室に戻りますので」

と言つて静流の腕を引つ張つて屋上を出て行く。ちよつと後ろを  
見てみると何人かが膝をついてこんなポーズ。〇ーーンをとつていた。

俺たちが人目につかない廊下に来た時に静流が急に口を開いた。

「秋、おっ俺が彼氏つて言つのは？」

「ば、ばか演技に決まつてんだろ何本氣になつてんだよ

「そつか、嘘か」

そう言つ静流は少し悲しげだつた。俺は急にさつきの事を思い出  
して恥ずかしくなつて体中が熱くなつてドキドキしてしまつた。俺  
はそつと静流の顔を見ると俺も少し悲しい気持ちになつてしまつた。

「お前が悲しそうにしてると俺まで悲しくなつてくるからそんな  
顔やめろよ」

と俺が言つと、静流は急に俺の両ほっぺを掴んでひつぱつて無理  
やり笑顔っぽいのを作らせられた。

「お前はやっぱ笑ってる顔が可愛いよ」

俺はまだドキドキしてたぶん今顔が真っ赤だろ。まさか俺はこいつに惚れているのか?いやそんなハズは断じてない。俺はそう自分を思い込ませ静流の手を払う事にした。

「はっはなせこのバカ」

俺が静流の手を払うと遠くからたくさんの足音が聞こえてそのほうを見ると屋上にいたたくさんの男子達がこっちに向かって走ってきていた。

「秋にげるぞ」

静流はそう言つて俺の腕を掴んで走り出した

## 第十六話 口常の再開（後書き）

最近はヴァイスシュヴァルツっていうカードゲームにはまってしまった A B ! とクドわふで組んでいましたが Fate zero もはまつたのでデッキ作ってます。二口生で凸待ちしてるので気がついたら宜しくです。

## 第十七話 伝説の〇〇（前書き）

梢、正輝、大河

秋と静流の友達。MOBキャラ以外で使用用途が今のところない  
ので名前のみ。

## 第十七話 伝説の〇〇

俺たちは廊下を走つて教室に入り込む。流石に他クラスの人は入つてこれないが同じクラスの人たちは入つてこれるので多少の覚悟をしたが俺がクラスに入ってきたときの光景を思い出した。

「あれ、皆教室内にいる？」

俺たちが教室に入った時にはもう皆が教室の中にいたのだ。先回りをしようにもある人物以外にどこに行こうとしていたか先読み出来る訳がないし・・・・。

そこで、俺は弓狩さんの言葉を思い出した。

（秋ちゃんへの思いやり）

これが皆の俺に対するの思いやりなのか？よく見ると他クラスに入り込もうとしている人が結構いるが必死に仁王立ちしている人がちらほら見える。「皆ありがとう」俺は心中でそう言つて静流といつも一緒に弁当を食べている梢、正輝、大河の三人の所に向かつていく。三人が向かい合う感じに座つていたので俺は正輝と大河の間に割り込む感じに座ると。

「うわっ

と二人同時に驚いた。この二人は普段から女子に慣れていないので驚く事がわかつていた、だから俺はその驚くのが見たくつてあってそうしたのだ。梢は少し俺の方を見た後に

「お前、胡坐かいてるとその白いものが見えるぞ」

と俺に向かつて言つてきた。白いもの・・・・なにか真つ白なものを朝見た気がする。なんだっけな。俺が少し考えた後に一瞬思考がフリーズする。まさか、と思い俺が視線を下に向けるとスカートからパンツが見えていた。俺は物凄く恥ずかしくなつていい。

少し経つて梢がまだ見ているのに気がつき俺は赤面している顔で梢を睨み。

「ばつ馬鹿、何いつまで見てんだよ」

その言葉を聞いた周りの数人の女子が梢を拉致つて行き、その後絹を引き裂くかのような悲鳴が聞こえたのはだれもが恐怖して疑問に思つ事すらできなかつた。

昼休みも終わり午後のテストもなんか全部埋めてどうせほぼ間違えただろうなあとか思いながらHRが始まる。

「ええと、皆さん明日がプール開きですのでしっかりと水着を持ってくるように、以上」

相変わらずめんどくさそうな副担任だなと思つたのもつかのま。えつ？プール今秋だぞおい、俺の名前じやなくて季節な。秋にプールなんておかしいだろそりや。

なにかの聞き間違えかと思つて俺は静流に聞くと。どうやらいつも学校のプールは温水のようだ。まだこの体にすら慣れていないつてのにプールなんて冗談じやない。あんなぴつぴつちな女子用水着なんて着たくなんかない。いや、でもそう言えば。俺は急いで携

帯を取り出し畠田の天氣を確認する。

「やつたあ、明日は快せ「一応言つておくが室内だぞ」

と静流の言葉により俺は最後の希望を絶たれてしまった。そうだ、温水の時点できが付くべきだった。外で温水なんて（作者は）聞いた事がない。あつたとしても（作者は）そんなもの知らないわ。

俺はHRが終わつた後、静流は部活があつたので一人で家まで帰り仕方がないのでアネキに・・・・、もうお姉ちゃんつて言つといつた方がいいのかな？俺は結局これからお姉ちゃんと言つ事にして電話をかけてみた。

「あ～、秋い～じうしたの～愛しのお姉ちゃんの声が聞きたくなつたの～それなら毎日かけてきていいんだよお～」

「違うつて、その・・・お姉ちゃんが昔着てた水着つてまだある？」

「秋、私の水着を着たいほどまでに愛していくれていたのね。ごめんねお姉ちゃん秋がそこまで私の事を愛してくれているなんて気がつかなか

「だ～か～ら～、明日プールで俺は女子用の水着なんて持つてないから借りようとしてるんだつて」

「わかつたから、叫ばないで。まだ耳がキンとしてるよ。私の部屋のクローゼットのたんすの下から2番目に入つてるからそれ使つて。あ、先生に呼ばれたからイチヤ電はまた今度ね」

- - - ガチャ - - -

「イチヤ電つて・・・・・」

俺は姉が言つていた通りクローゼットの下から2番目を開けるとそこに水着があつた。俺はそれを取り出して広げてみるとそれは。

「こ、これが・・・伝説の旧型のスク水つてやつか」

俺はそれを持って自分の部屋に戻つてそれを着てみる事にした。

着てみると思った通りぴっちぴちで全身を鏡で写してみた。女子の水着姿をあんまりじつと見た事がなかつたので俺はすこし顔が赤くなつてしまつた。

その時扉がガチャと開き一人の男が入つてきた。

「ななななな、しつ 静流」

## 第十七話 伝説の〇〇（後書き）

少しの間停止してしまいましたがまた再開します。何故停止していたのかというと秋のイラストを描いてみようと思い新品のペントタブのペンを片手に書いてみた所百回くらい書いて百回くらい書きなおしてもうまく書けなかつたです（：・・）（数は相当盛りましたwww）

さあ、次回は水着姿の状態で静流が秋の部屋に入つてしまつた状況から始まります。実はずつとお母さんが秋の事を呼んでいたのですが恥ずかしさのあまり全く耳に入つてなかつたわけであり・・・。次回もお楽しみにつ！

## 第十八話 動搖（前書き）

はい、今日は静流視点です。

今日は短くしてしまいましたが次回から長くしていきます。

## 第十八話 動搖

「ほんにむかーー」

俺がドアの前でそう軽く叫ぶと秋のお母さんが出てきた。

「あら、静流くんこらっしゃーー。秋に用かな?」

「はい、ちょっと渡すものが

「もしかしてラブレター?」

「いや、違いますから

いきなり何を言い出すんだろうこの人は。俺がそう思つて秋を呼んでもらおうと思ひ頼むが、秋のお母さんがいくら呼んでも返事がなかつた。

「俺が直接会いに行くんでいいですよ」

俺はそう言つて階段を上り秋の部屋の前に立ち、ドアノブに手をかけガチャッと扉を開ける。そして俺は目を見開いた。そこには水着姿の秋がいた。

「なななな、しつ 静流」

秋が俺に気がつき裏返つた声なのか普段よりも高くいつもより綺麗な声でそう言って、みるみる顔が赤くなつていいく。俺はその姿に見入つてしまつた。体のラインがしっかりと見え腰が細く、そしてつ

るべつたんな胸。

「いつまで見てんだよばかっ、早く部屋から出でいけっ」

俺は秋にそう言われて慌てて部屋から出て扉を閉めてから廊下の壁に寄り掛かる。

少し経つと秋が水着を脱ぐ音が聞こえてきて俺は今秋の部屋の中で起こっている事を想像してしまいドキドキしてしまう。しばらくたつた後に少しだけ開いた扉から秋が少しだけまだ赤い顔をのぞかせて。

「もう入って来て、いいよ

俺はゆっくりと秋の部屋の中に入つて行く。

「それで、用はなんなの？」

と秋が小さな声で言つ。

「いや、お前が水着持つてるかどうか心配で佳代から借りて來たんだけど。必要なかつたな」

「人の部屋に入るときくらい、ノックくらいしてよ

「う、ごめん。まさか水着に着替えてたとは思わなかつたから」

「私が、私が着替えてる途中だつたらどう責任とつてくれるの？」

あれ、またこいつ私つて言つてる。確か前にも一度私つて言つた

事があつたな。あのときは怖がつてた氣がする。もしかして心が動揺してゐるときにそつなるのか、だとしたら・・・・・・うんやつぱりこつちが上手く接してあげないとダメかな。

「ねえ、静流聞いてるの？」

「えつ、あつうん聞いてる聞いてる。そうだよな、うん」

やつぱり聞いてないじせん、静流の馬鹿つ

うう、こんな可愛い容姿に馬鹿って言わると心が痛む。どうとか許してもらわないと、どうする謝るか？いや、でも秋は許してくれるか？ええい、当たつて砕けるだ。

「ごめん秋つ」

「ほつ・・・・・ 謝られるとそれ以上責められないじゃん。それで・・・・・ どうだった?」

「え、どうだつたつて？」

「私の、水着姿見たじやない。それでどうだつたの？」

どうだつたと言われても・・・でもここでは正直に言つておいた方がいいよな。俺はそう思つて秋に正直に言つ事にした。

「か、可愛いからたよめぢやくぢや」

俺がそう言つとまた秋の顔がみるみる赤くなつていいく。

「馬鹿」

と小さく最後に秋が言い。「もう帰つて」と言われたので俺は帰ることにした。明日、秋大丈夫なのかな?

## 第十八話 動搖（後書き）

今日は作者の体力温存の為に短くしました。  
次回はプールという事であんなことやこんなことが・・・。  
ら少しずつ1話1話を長くしていきたいと思います。  
次か

## 第十九話 思考回路の崩壊（前書き）

はいどーも、3日ぶりの投稿になるのかな?  
遅れてしまつて申し訳ないm(ーー)m  
さて今回から少しずつ話を長くしていこうとこいつ事で3000台からになりました。大体どれくらいが短すぎなく長すぎない位なのか意見とかをもらえれば嬉しいです。  
では、第十九話お楽しみください。

## 第十九話 思考回路の崩壊

その日は朝から最悪な気分だった。今日からプールが始まるのだ。

プールは気持ちがよくって良いじゃないかと思う人もいるだろう、確かに気持ちがいいと俺も思う。だけどそれは泳ぐことに関してだ。俺が一番恐れているのは着替えの時だ。クラスメイトにゲイでもいるのか？と思ったか？そもそも『俺』と言っているが俺は男ではない。正確には男だったが数日前に朝起きたら女になっていたってことだ。そのため、もちろん着替えも女子更衣室になるわけだ。他の人から見たら天国じゃんと思うかもしれない。でも実際今の俺の状況になると天国なんかじゃない、地獄だ。

クラスメイトは俺が元男ということを知っているわけで、俺が男にはなく女にあるものを見てしまつとほぼ確実に変態呼ばわりされてしまうわけだ。せつかくみんなは俺の事を受け入れてくれるって言つてくれたのにそんなことになつたら皆の信用を失つてしまつがする。俺はそれを恐れているから今日という日が憂鬱で最悪な気分なんだ。おまけに天気は最悪なくらいよく、肌が少しひりひりする。日傘をさしているのだが道路にあたつてわずかに光が反射してきたりするのでせめての救いは軽度だった事であろうと思う。実際、日光過敏症は日傘を差しても意味がないくらいに肌が赤くなつたりして痛くなつたりするらしい。その分俺はひりひりするぐらいで済むからまあラッキーだったのである。

そんな事を考えながら一生懸命プールの事を忘れようとしていると学校に着いた。俺は朝練をやっている人たちの脇を通つて行く。その際いろんな人の視線が感じられた。多分チビで日傘なんかさして気取つてゐるやつとでも思われているのだろう。俺が元男というの

はクラスメートしか知らないし病気のこともわかつだ。だから他クラスの人など思われようと仕様がないと思つ。

俺はせつせつと教室に向かうと今日は一番だつた。俺が男のときはいつも時間ぎりぎりであった。それも俺が男のときはだいたい2時くらいに寝てから朝起きれずにギリギリになつてしまつのだ。しかし女になつてからは20時くらいには物凄く眠くなつてしまつ朝は早く起きられるのだ。席について少し経つと狩さんが来た。

「あ、秋ちゃん今日もはやいね~」

「『狩さんおはよ』

俺は『狩さん』返事をすると『狩さんは少し何か考える様に手を顎に当てていた。

「どうしたの?」

と俺が聞くと『狩さんは少し時間をおいて口を開いた。

「うーんとね、秋ちゃんはさ容姿と面葉づかいがあつてない気がするんだよねえ。折角そんなに可愛い容姿なのに俺とか言つてると少し可愛さが損なわれるし・・・あと、声作ってる?」

「え?、声作つてないってこと?」

「秋ちゃんの声を少し違和感があるんだよね、なんていうか無理して出してるみたいな気がしてならないんだよ。もしかして地声だとあんまり大きい声出せない?」

「なんでわかつたの、確かに普通に声出すと無駄に高いよつた気がして気持ちが悪いんだよ」

最初の方は俺は地声でしゃべっていたがそれだと大きな声が出せないし無駄に高くて気持ちが悪かったのだ。だから俺は少し無理して低めにしゃべっているがやはり高いままだが多少は気持ち悪くなつたのだ。

「うう」と地声でしゃべつてみてよ、一回だけでいいから」

「ええ、まだよ」

「お願いつ！」

俺は断つたがなんか可愛らしい声で頼まれてしまったので断れなくなってしまった。どうやら男としての意識は普通に残っているようだ。

「わかつた、じやあいぐよ…………」「あー」（地声）

「うわー、すまじく可愛いよ。普段もそれで話せばいいのに」

「変じやなかつた？無駄に高いし」

「せんせん無駄じやないよ、容姿に合つててす」に可愛によ。あとは口調だけだねえ、私つて言うのはいきなりだと大変だらうから・・・・じゃあ、ボクつて言うのは？」

「うーん、なんかそれもちょっと抵抗あるな、俺のままじや駄目？」

俺がいつも聞く「狩さんほんとうにうつしがい。

「うん、黙田」

そんなに笑顔で言わると断れない、もしかして分かつてやつていいのか?だとしたら結構ひどいな。

「わかつたよ、じゃあ俺はよつなうで、今日からボクにするよ」

「うそつさ、じゃあ早速ボクって言つて」

「ほ、ボク」

と俺が言つと教室のドアの窓からのがれいでたと細つせうへんの女子が入つて來た。

「あやー、秋ちゃん可愛い」

「私ロツコソ田間めちやうかも」

ロツコソ田間めのつて・・・・・・なんか怖い。俺はそんな事を考えながら少し後ずつたりをする。その様子に気がついた『狩さん』に俺、もといボクは捕まえられる。『狩さんはボクを捕まえた後に何かを思い出したようだつた。

「あ、やつだ秋ちゃんちゃんと水着持つてきた?アレで休むとかは無しだよ?」

「あ、アレ?」

アレとは何なのだらけ、ボクは分からなかつたので聞いてみた。

「あー、そつか秋ちゃんはまだ未体験か。それじゃ、その時が来る事を待つてよづか」

未体験つてなんだよ、多分卑猥なことではないはずだうん。

だんだんとクラスメートが登校していくなか、静流が朝練が終わつたのか汗を拭きながら教室に入つてくる。昨日あんな事があつたから話しにくいなあ」と思つていると静流もそう思つているのか何も話しかけてこなかつた。朝のHRが始まり先生が黒板の前に立ち挨拶をする。

「みなさんおはようございます」

と先生が言つと顔がぱらぱらと挨拶をする。

「といひで今日はプールですが秋さんはどうするんですか?」

と先生に聞かれた。ボクとしては個室とか保健室とかが良いのだが、これから事を考へるとそう言つのに慣れたほうがいいような気がしてならなかつたし。結局は。

「先生つ、その事はもつ話合つて秋ちゃんは一緒に女子更衣室使う事に決まりました」

と『狩さんが言つてしまつたのでボクは個室とか保健室がいいと思つたのだが、そういうのも悪いと思つたので何も言えなかつた。

HRが終わってすぐ他の女子達と更衣室に移動する。のだがボクはその間ずっと皆に話しかけられていた。

「ねえ、秋ちゃんはどんな水着なの？」

とか。

「秋ちゃんスタイル良さそう見えるけど腰とか細い？」

などいろいろ聞かれたがわかる範囲で答えた。その質問にはいくつか卑猥な事も混じっていたがそれを言だれかが言つた場合直後「ン」と鈍い音と誰かのぎやつて声がして後ろを見ると何人かの女子が頭を押されてうすくまつてているつている姿が見えた。女子って怖いなと思って、自分も慣れればあんな感じになるのかなとか思つていた。

更衣室に着き驚いた事は・・・・更衣室に対して驚いたことはなかつた。

「あれ、どうしたの秋ちゃん」

と一人の女子が聞いてくる。どうしたもなにも、普通に考えて恥ずかしいとわかるだろ？

「あれ、もしかして恥ずかしがつてるの？ 可愛い～秋ちゃん」

と誰この人？って感じの女子に抱きつかれた。おまけにその女子は下着だけで裸に近い状況だった。

「ななななな、なにするの」

「あはは～、顔真っ赤にしてれちゃって可愛い～」

と言われて恥ずかしくなつて顔を隠していると今度は『狩さんの手がボクの服をつかんで。

「ほら、早く着替えないと遅れるよ」

といつて服を脱がしていくので一生懸命抵抗しようとするが無意味な抵抗になつてしまい、今一糸も纏わぬ姿、生まれたままの姿と言つべきだらうか。その状態で大切な部分だけを手で隠している姿になつてしまつていて。そんな状況でただでさえ恥ずかしいのに胸を隠している手を『狩さんにだけられてしまい胸を触られてしまつた。

「ひやっ」

と思わず変な声が出てしまつたが『狩さんは気にせず』。

「ふうん、つるぺつたんつてこんな感じなのかあ」

そういひ『狩さんの胸の方に視線をすらすと大きくつて何とも言えない屈辱感を感じてしまつた。おまけに『狩さんは胸を揉んできて初めは変な気持だつたがだんだん体中に力が入らず気持ちよく感じてしまつた。

「ゆ、ゆか、つさん。は、はなしてえ」

そんな状態でボクは言つが力が入らずに変になつてしまつた。

やのうちあんまりにも気持ち良すぎただんだんと意識がおかしくなって頭の思考回路が崩れてきてなにも考えられなくなってしまった。

「や、ゆかりちゃん、ほ、ボク頭が変になつてきりやつ」

と言つとやつと『狩さんは離してくれた。

「あつ、『めん秋けやん。それにしてもそんなこいつかやーのこ感度はず』」  
「高いね」

と言われたがまだ頭がぼーっとしてしまつていた。

## 第十九話 思考回路の崩壊（後書き）

この時期、年末という事もあり大掃除の大詰めがやっと終わりゆつたりとしてる人も多いのでは?と思う作者です。

皆さんには年越し蕎麦でも食べながらガキ使や紅白などを見てるのだろうと思います。自分ですか?自分は紅白は水木奈々だけ見てましたねwww後はP.Cに向かい合つてこれを書いていました。今回はいろいろとあんなことやこんなことになつてしまい完璧に18禁にこれからなつて行くのでは?と心配な面もありますがそう言うのが好きな人もいるんですよね?まあ、ちょっと危なさそつなのはこれからは少し控えめにして行こうと思います。

今回を見て大掃除の疲れなどを取れたりして頂ければ作者としても嬉しい限りです。それではもう少しで今年も終わり来年になります。皆さんには充実した一年になりましたか?作者は微妙でしたね。まあ、今年にあつた悪い事はゲームやテレビラノベなどの小説などの『えんた』ていんめんと』で忘れて行きましょう。それでは、よいお年を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2088z/>

---

秋の夕暮れ

2011年12月31日21時46分発行